

# 寺 平 遺 跡

2003

財団法人 岐阜県教育文化財団

てら だいら  
**寺 平 遺 跡**

2003

財団法人 岐阜県教育文化財団

## 序

寺平遺跡は、旧徳山村のほぼ中央を流れる揖斐川上流の左岸に位置しています。この付近は、小字名で寺平と呼ばれていることから、この遺跡名がつけられました。「徳山村史」などには、中世の頃この付近に密教系の寺院があったという伝承を記していますが、詳しいことは史料もないことからわかつていません。

このほど徳山ダム建設事業に伴い、平成13年度に発掘調査を行いました。その結果、伝承を裏付けるように、小規模ながらも礎石建物跡や掘立柱建物跡を発見しました。しかし、伝承とは違って、建物跡が存続していた時代は、平安時代であったことが判明しました。また、縄文時代の遺構・遺物を確認したことも発掘調査による新たな発見でした。そこから得られた資料は貴重なものであり、その成果が広く県民の皆様に活用されることを願ってやみません。

本報告書が埋蔵文化財に対する認識を深めるとともに、当地の歴史研究の一助となれば幸いです。

最後となりましたが、発掘調査及び出土品の整理・報告書作成にあたりまして、多大な御支援・御協力をいただいた関係諸機関並びに関係者各位、藤橋村教育委員会、地元地区の皆様に深く感謝申し上げます。

平成15年12月

財團法人 岐阜県教育文化財団  
理事長 日比治男

## 例　言

- 1 本書は、揖斐郡藤橋村に所在する寺平遺跡（岐阜県遺跡番号21407-08721）の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、徳山ダム建設事業に伴うもので、水資源開発公団徳山ダム建設所から岐阜県が委託を受けた。発掘調査及び整理作業は、財団法人岐阜県文化財保護センター（現 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター）が実施した。
- 3 発掘調査は平成13年度に、整理作業は平成14年度に実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の体制は、第1章第2節に一括して掲載した。
- 5 本書の編集及び執筆は、第4章を除いて春日井が行った。
- 6 発掘調査における作業員雇用・現場管理・掘削・空中写真測量などの業務と出土遺物の洗浄・注記作業は、株式会社イビソクに委託して行った。
- 7 遺物の俯瞰・立面写真撮影は、アートフォト右文に委託して行った。遺構写真は、春日井が撮影した。
- 8 自然科学分析（放射性炭素年代測定・FT-IR分析）は、株式会社パレオ・ラボに委託して行い、その結果は、第4章に掲載した。
- 9 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、次の方々や諸機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略・五十音順）  
浅野哲男・泉拓良・五十川伸矢・伊藤幸司・伊藤正人・菅原章太・矢野健一・渡辺博人  
各務原市埋蔵文化財調査センター
- 10 本文中の方位は、国土座標系第Ⅷ系の座標北を示している。
- 11 土層及び土器類の色調は、小山正忠・竹原秀雄1998『新版 標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。
- 12 調査記録及び出土品は、財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センターで保管している。

## 目 次

序

例言

目次

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査の経過と方法	2
第2章 遺跡の環境	5
第1節 遺跡の位置	5
第2節 周辺の遺跡	6
第3章 調査の結果	11
第1節 基本層序	11
第2節 遺構・遺物の概要	12
第3節 中世以降	19
第4節 平安時代	20
第5節 繩文時代	39
第6節 トレンチ調査の結果	47
第4章 自然科学分析	51
第1節 放射性炭素年代測定	51
第2節 灰釉陶器の黒色付着物のFT-IR分析	53
第5章 まとめ	57
写真図版	
報告書抄録	

## 写真図版目次

図版1 1 寺平遺跡全景	
図版2 1 調査区全景、2 碓石建物跡全景	
図版3 1 SK64土層、2 SK64、3 SS 1、4 SS 2、5 碓石建物跡、6 小土坑列、 7 SI 1、8 SI 2	
図版4 1 挖立柱建物跡、2 挖立柱建物跡、3 SP 3土層、4 SP 4、5 SP 8確認状況	
図版5 1 調査区西部土坑群、2 調査区南東部土坑群	
図版6 1 平安時代の遺物	
図版7 1 SK47、2 SK47遺物出土状況、3 SK68、4 SK108、5 SK113土層、6 SK113、 7 石錘(38)縄掛け部拡大、8 打製石斧(45)刃部拡大	
図版8 1 縄文土器、2 石器①	
図版9 1 石器②、2 TR 4土層、3 TR 5土層、4 TR 6土層、5 TR 8土層	
図版10 1 灰釉陶器付着物のマイクロスコープ写真	

## 挿図目次

図1 寺平遺跡の位置	1	図23 平安時代の土坑②	30
図2 調査区設定図	2	図24 平安時代の土坑③	31
図3 TR 1 西壁土層断面柱状図	3	図25 平安時代の土坑④	32
図4 試掘調査坑設定位置図	3	図26 平安時代の土坑⑤	33
図5 寺平遺跡周辺地形	5	図27 平安時代の溝状遺構	36
図6 周辺遺跡位置図	7	図28 包含層出土灰釉陶器・土製品	37
図7 徳山地区における平安時代の建物遺構	8	図29 トレンチ設定位置図	39
図8 遺構(調査)面模式図	12	図30 繩文時代の土坑	41
図9 遺構配置図	13	図31 繩文時代土坑出土遺物	42
図10 石器組成グラフ	15	図32 SK113	43
図11 遺物出土分布図	16	図33 包含層出土石器	45
図12 SK64	19	図34 TR 4・TR 6 土層断面図	48
図13 磚石建物跡	20	図35 TR 5 土層断面図	49
図14 SS 2 及び磚石建物跡西側出土遺物	21	図36 TR 8 土層断面図	50
図15 挖立柱建物跡	23	図37 寺平遺跡灰釉陶器内側付着物および 生漆のFT-IRスペクトル図	54
図16 SP 3 出土遺物	24	図38 寺屋敷遺跡灰釉陶器内側付着物および 生漆のFT-IRスペクトル図	55
図17 SI 1・SK73	24	図39 上原遺跡第2地点灰釉陶器内側付着物 および生漆のFT-IRスペクトル図	56
図18 SI 2 及び挖立柱建物跡	25	付図(寺平遺跡発掘調査平面図)	
図19 TR 1 東壁・南壁土層図	26		
図20 小土坑列	27		
図21 焼土	28		
図22 平安時代の土坑①	29		

## 表 目 次

表1 周辺遺跡一覧	6	表12 平安時代の溝状遺構一覧	35
表2 層位別造構数一覧	14	表13 灰釉陶器観察表	38
表3 土器類出土量	14	表14 土製品観察表	38
表4 石器類器種別数量	15	表15 繩文時代の土坑一覧	39
表5 中世以降の土坑一覧	19	表16 繩文土器観察表	43
表6 磚石形形一覧	21	表17 出土石器観察表	46
表7 挖立柱建物跡柱穴一覧	22	表18 放射性炭素年代測定および 歴年代較正の結果	51
表8 小土坑列一覧表	27	表19 FT-IR分析を行った灰釉陶器と 黒色付着	53
表9 平安時代の土坑一覧①	28	表20 主な平安時代遺跡の消長	58
表10 平安時代の土坑一覧②	34		
表11 平安時代の土坑一覧③	35		

## 挿入写真目次

写真1 調査前近景	4	写真2 発掘調査作業風景	4
写真3 磚石建物跡西側出土状況	21	写真4 SP 3 遺物出土状況	24

## 第1章 調査の経緯

### 第1節 調査に至る経緯

当遺跡は、揖斐郡藤橋村大字塚字寺平に所在し、揖斐川左岸の丘陵先端部に位置する。古くから寺があったとの伝承が残る場所であった<sup>1)</sup>が、遺構・遺物などは確認されておらず、当初は遺跡としての取り扱いはされていなかった(岐阜県教委1985)。しかし、徳山ダム建設によって水没する地区に含まれていたことから、1994（平成6）年に当センターが遺跡の有無確認のための試掘調査を実施したところ、平安時代の土器が出土した。これにより、同年11月に当センターから岐阜県教育委員会に遺跡発見通知が提出され、埋蔵文化財包蔵地として取り扱われることになった。1999（平成11）年には、当センターが発掘調査範囲を確定するための確認調査を実施し、平成11年度岐阜県埋蔵文化財発掘調査検討委員会において発掘調査範囲を決定した。その後、水資源開発公団徳山ダム建設所と岐阜県教育委員会との協議を経て、2001（平成13）年に発掘調査、2002（平成14）年に整理作業を実施することとなった。

1) 「徳山村史」(徳山村役場1973) や「徳山村のあけぼのを求めて」(徳山村の歴史を語る会1984)、「美濃徳山の地名」(水資源開発公団徳山ダム建設所1997) によるが、「徳山村史」では、「福井県池田町皿尾の円淨寺は、もと塚にあり、天台宗の寺であったが、天正年間(1573~1592)現地に移り、真宗誠照寺派に転宗したという。」と書かれ、「徳山村のあけぼのを求めて」では、20m × 30m ほどの平坦地に大きな川原石が露呈しており、寺院跡の可能性が高いと指摘している。さらに『美濃徳山の地名』では、移転した円淨寺の所在した場所を寺平の地に想定している。また、塚には白山神社が所在していたが「古くは村の山方にあったものが現在地に移ったといわれ、その年代及び理由は不明である。」とも『徳山村史』には記されている。なお、隣接する長吉遺跡の発掘調査では、中世の陶器片が5点出土している(篠田ほか1994)。



図1 寺平遺跡の位置 (S = 1/50,000、国土地理院発行1:50000「冠山」)

## 第2節 発掘調査の経過と方法

1999年の確認調査により、丘陵先端部の狭い平坦地全城が遺跡範囲であると確認できたため、この770m<sup>2</sup>を対象として発掘調査を行った。この平坦地は、人為的なものと思われる地形の段差があり、確認調査ではこの段の上部に礎石状の石列を確認した<sup>2)</sup>。このため、地形の段差が建物施設の構築と関係がある可能性を想定し、遺跡内の除草後、発掘調査に先立ち地形測量を行った。しかし、遺跡が所在する平坦地は、開墾時期は不明であるが、徳山村庵村以前は畠地として利用されており、地形の段差が開墾による可能性も考えられた。

調査区は、国土座標上の南北方向を基準とし、4 m × 4 mに区画した（図2）。調査区画は、西から東へA～J、北から南へ1～7とし、調査区画の呼称は西北角の杭番号を用いた。確認調査により、基本層序をI層からVI層まで設定し、II層が古代以降の包含層、III層以下が古代より前の堆積層と判断していた。発掘調査では、先ず重機により調査区内全面の表土層（I層）を除去し、II層をすべて人力で掘削した。II層から出土した遺物は、出土位置を測定して取り上げ、III層の上面で遺構検出作業を行った。調査区内は、緩やかな傾斜を持つとともに、前述のように段差が作り出されており、I層からVI層の層序を確認できるのは、調査区の中央部分を中心とする範囲で、西部と東部では表土（I層）下がすぐに基盤層（VI層）となるところがあった。

出土した遺物は、原則としてすべてトータルステーションにより出土位置を測定して取り上げた。遺構調査にあたっては、必要に応じて平面図・土断面図などを作成した。発掘調査区全体の平面図作成及び写真撮影は、ラジコンヘリコプターによる空中写真測量を行った。その後、IV層以下の遺構

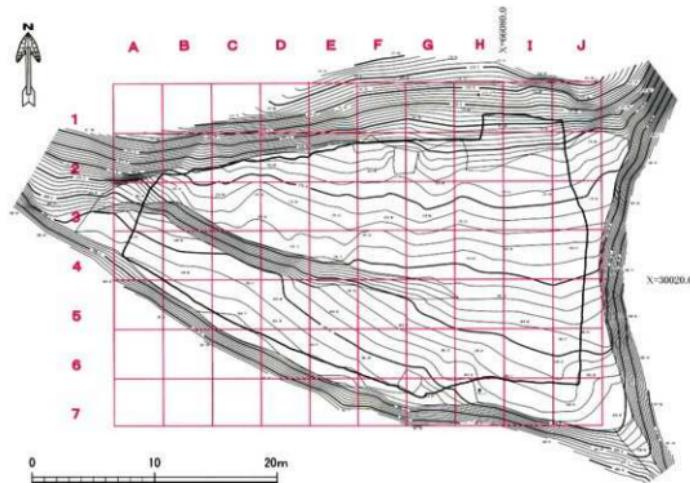


図2 調査区設定図 (S=1/400)

の有無を確認するため、トレンチ調査を実施した。このトレンチ調査は、当初調査地の土層堆積状況を確認するのが目的であった。しかし、確認調査では検出できなかった縄文時代の遺構・遺物を、発掘調査において検出したため、この縄文時代の遺構・遺物の広がりを把握することも目的の一つとなったのである。トレンチ調査では、縄文時代の落とし穴遺構を1基確認したほか、数点の土器小片が出土しただけであったため、トレンチを拡張することなく発掘調査を終えた。

以下、発掘調査日誌から抜粋して、週毎の調査経過を記述する。

第1週(9.25~9.28) 重機による表土除去作業、調査区画設定、調査区への進入路整備などを実施し、人力による包含層掘削及び遺構検出作業を、B 2・B 3区から東へ向かって開始する。

第2週(10.1~10.5) F 3区にて集石遺構(SI 1)を検出。H 4区にて、縄文土器がまとまって出土する。

第3週(10.9~10.12) H 2区~I 2区で扁平円窓が2個出土。間隔は2.7mほどあるが、礎石の可能性を想定する。掘立柱建物跡柱穴から灰釉陶器出土。H 4区の縄文土器がまとまって出土した場所で、土坑を検出(SK47)。土坑内からも縄文土器出土。

第4週(10.15~10.19) II層掘削及び遺構検出範囲が調査区の東端に達したため、H~I列を南に向かった後、折り返すように西に作業を進めた。調査区の南部にあたるE 5区~F 6区は、谷状

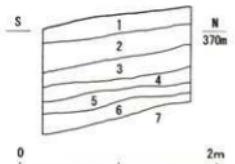


図3 TR 1 西壁上層断面柱状図  
(S=1/50)

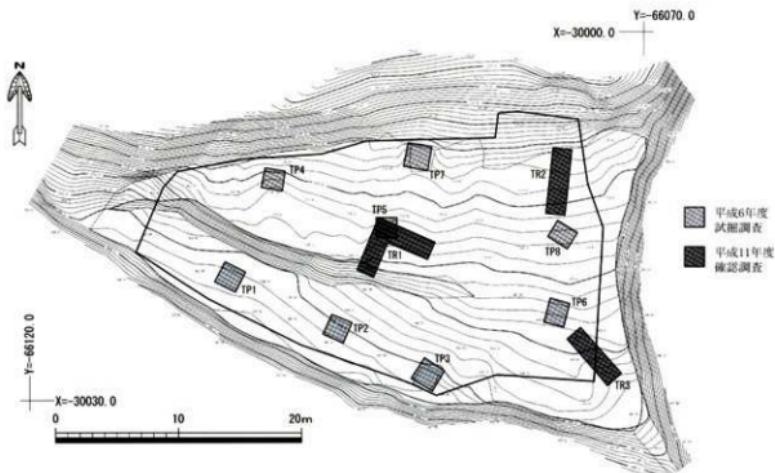


図4 試査調査坑設定位置図 (S=1/400)

#### 4 第1章 調査の経緯

にやや低くなっている。II層が厚く堆積している。

第5週(10.22~10.26) 調査区の遺構検出・掘削作業を終え、ラジコンヘリコプターによる空中写真測量を行う。また、調査区の発掘調査状況や遺構掘削状況の写真撮影及び、礎石建物跡や土坑列のエレベーション実測を行う。

第6週(10.29~11.2) トレンチ調査を行う。TR7において、落とし穴遺構(SK113)検出。TR6において2基の柱穴を確認し、III層上面で検出した他の2基の土坑(SP1・SP2)との配置関係から掘立柱建物跡と断定する。これらの柱穴配置から、まだ見落としている柱穴が2基以上あると考えられたため、さらにTR10を設定した。III層をやや掘り下げたうえで、あらためて検出作業を行ったところ、2基の柱穴を確認した。

第7週(11.5~11.9) トレンチ調査を終え、発掘調査を終了した。この後、12月3日までに現地事務所の撤去作業を実施する。

整理作業は、2002年4月から翌年3月まで実施した。発掘調査から整理作業までの体制は以下の通りである。

理事長	服部 卓郎（平成13・14年度）
専務理事兼事務局長	成戸 宏二（平成13・14年度）
常務理事兼経営部長	福田 安昭（平成13・14年度）
経営部次長兼経営課長	福田 照行（平成13・14年度）
調査部長	武藤 貞昭（平成13・14年度）
調査部次長	片桐 隆彦（平成13・14年度）
担当調査課長	坂東 聰（平成13年度）、高木 徳彦（平成14年度）
担当調査員	春日井 恒（平成13・14年度）
整理作業従事者	小澤真紀子、知本俊美、蔽下賀代子、山口久子

なお、当センターは2003年4月から、組織改編に伴い、（財）岐阜県教育文化財団文化財保護センターとなった。上記の体制は、2003年3月までのものである。

2) この石列は、発掘調査の結果、掘立柱建物跡南側の集石遺構(SI2)と判断した。



写真1 調査前近景



写真2 発掘調査作業風景

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 遺跡の位置

旧徳山村は、岐阜県美濃地方の北西部に位置し、福井県と滋賀県に接している。周囲は越美山地と呼ばれる山々に囲まれ、糸迦嶺に源を発する揖斐川とその支流が大きく北西から南東に向かって流れている。遺跡の大半は、この河川沿いに形成された河岸段丘上に立地する。

寺平遺跡は、藤橋村大字塚字寺平に所在し、揖斐川上流左岸の南に向かって突き出した尾根の先端部に位置する（図1）。遺跡が所在する標高は370m前後で、この尾根の麓に形成された河岸段丘面との比高差は20mほどである（図5）。この河岸段丘上には、1991年に発掘調査が行われた長吉遺跡が所在する。また、寺平から約600m上流には旧塚集落があり、ここに所在する塚遺跡は、1990年～1991年に発掘調査が行われている。

なお、徳山地域の自然環境については、『長吉遺跡・普賢寺遺跡』（篠田ほか1994）及び『山手宮前遺跡』（小谷ほか1997）に詳細が述べられており、これらを参照されたい。



図5 寺平遺跡周辺地形図 (S=1/2,000)

## 第2節 周辺の遺跡

揖斐川の両岸にある河岸段丘上には、いくつかの遺跡が確認されているが、寺平遺跡周辺に所在する遺跡について、過去の発掘調査結果などから概要についてふれる。徳山地区の歴史的環境については、すでに『山手宮前遺跡』(小谷ほか1997)、『上原遺跡Ⅰ』(河村ほか1998)などにおいて詳細が述べられており、これらを参照されたい。

寺平遺跡の眼下には長吉遺跡があり、ここから直線距離で、揖斐川の上流側へ約0.6kmの位置に塙遺跡、約2.5kmの位置に塙奥山遺跡がある。下流側へは、約0.8kmの位置に櫛原神向遺跡、約1.1kmの位置に櫛原村平遺跡がある。旧櫛原集落の手前では、扇谷川が揖斐川に合流しており、合流地点から約1.1km扇谷川を遡るといじま遺跡がある。さらに揖斐川を下って、寺平遺跡から約2.9kmの位置に寺屋敷遺跡、約3kmの位置に磯谷口遺跡、約3.6kmの位置に山手宮前遺跡、約4kmの位置に尾元遺跡、約4.3kmの位置に上原遺跡がある(図6)。櫛原神向遺跡・山手宮前遺跡・上原遺跡は揖斐川右岸に、他の遺跡は揖斐川左岸に立地している。

長吉遺跡は、1991年に発掘調査を行い、縄文時代及び中世の遺跡であることが判明した(篠田ほか1994)。検出した遺構は、縄文時代晩期後半の土器柄だけであるが、他にも土坑状の凹みを確認しているものの、これらの性格は不明とされている。縄文時代の遺物の中で、時期的にまとまっているのは早期後半と晩期後半の土器で、早期後半では、茅山下層式土器に類似するものが主体を占める。また、少量ではあるが、早期末～前期初頭及び中期末の土器も出土している。中世以降の遺物は、陶器片が5点出土しているだけであり、遺構は確認できていない。しかし、報告者は13世紀の古瀬戸有耳壺片が含まれていることを重視している。

塙遺跡は、1990年～1991年に発掘調査を行い、縄文時代の集落跡であることが判明した(篠田ほか

表1 周辺遺跡一覧

	縄文時代						弥生時代	古墳時代	奈良時代	平安時代	室町時代
	草創期	早期	前期	中期	後期	晩期					
塙奥山遺跡											
塙遺跡											
寺平遺跡											
長吉遺跡		■	■				■			■	
櫛原神向遺跡											
櫛原村平遺跡											
いじま遺跡											
寺屋敷遺跡	■	■									
磯谷口遺跡											
山手宮前遺跡											
尾元遺跡											
上原遺跡											

■遺物あり ■まとまった遺物あり ■遺構あり 太字は発掘調査された遺跡  
 \*未調査遺跡については、徳山村の歴史を語る会1984、『山手宮前遺跡』(小谷・中島ほか1997)、『上原遺跡Ⅰ』(河村・近藤ほか1998)などによる。

1998)。平安時代以降の遺物も少量出土しており、何らかの活動が行われたことを示している。検出した遺構は、中期後葉から中期末の竪穴住居跡5軒、後期前葉の竪穴住居跡2軒の他、集石造構、土器埋納施設、土坑などがある。中心となる時期は、竪穴住居跡などを確認した中期末から後期前葉の時期で、その前後の時期では、遺物が少量出土するものの遺構は確認していない。

塙奥山遺跡は、1996年～2002年に発掘調査を行い<sup>1)</sup>、縄文時代の集落跡であることが判明した。近世の遺物も出土している。検出した遺構は、中期から後期のものが中心であるが、量的には徳山地区の中でも最大級の遺跡である。竪穴住居跡は、中期後葉から中期末のものが最も多く、その前後の時期のものも確認されており、中期末から後期にかけての配石造構や土坑も多い<sup>2)</sup>。

寺屋敷遺跡は、1993年～1995年に発掘調査を行い、旧石器時代・縄文時代・平安時代の遺跡であることが判明した(三島・藤根2001)。特に徳山地区内では、旧石器時代の遺物がまとまって出土した唯

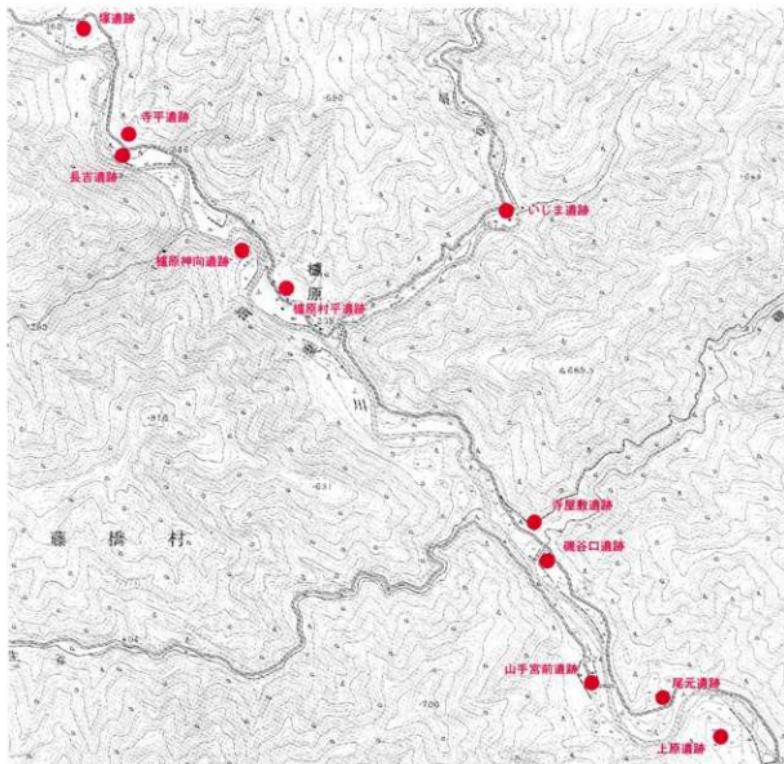


図6 周辺遺跡位置図 (S=1/25,000、国土地理院発行1:25,000「美濃徳山」)

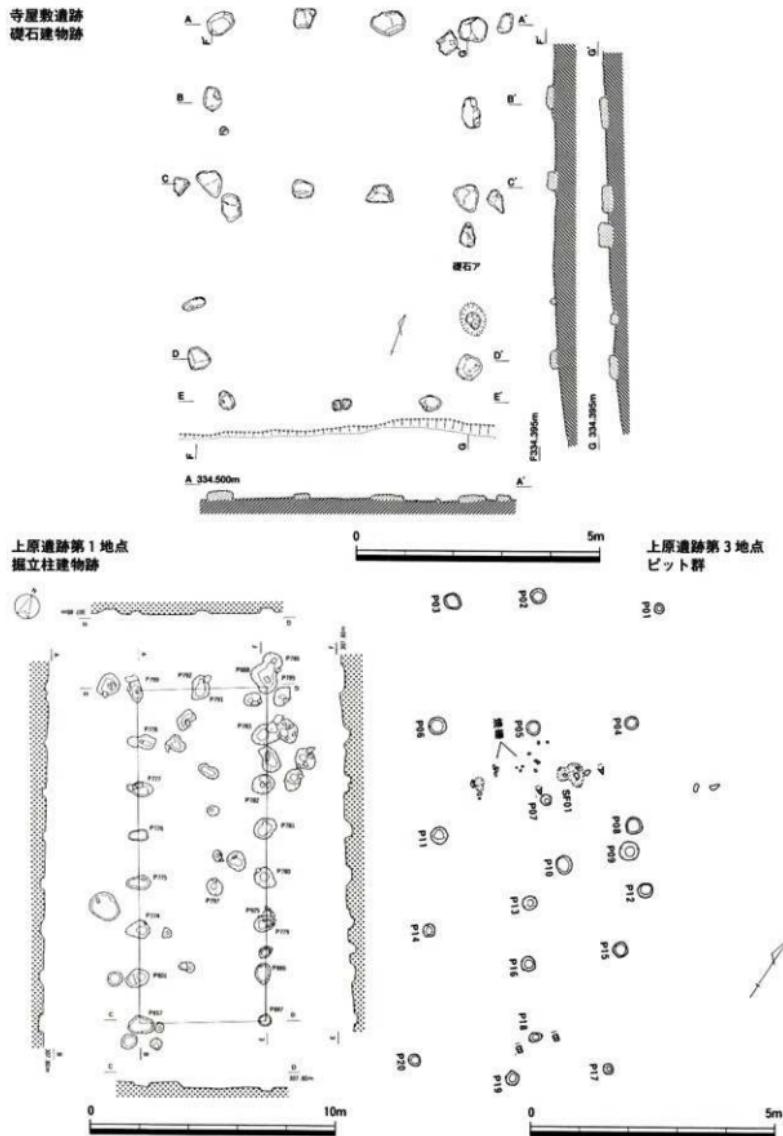


図7 徳山地区における平安時代の建物遺構

一の遺跡として注目される。検出した遺構は、平安時代のものとして礎石建物跡1棟、道状遺構、焼窯集積遺構、土坑などが、縄文時代では中期後半の堅穴住居跡1軒や土坑などがある。平安時代の礎石建物跡は、出土した灰釉陶器多口瓶や鉄釘、螺髮などとともに、宗教関係施設のものとして注目される。出土した灰釉陶器は、折戸53号窯式に比定されており、10世紀前半代の建物と考えられている。また、皿に漆状のものが付着していることが報告されている。

磯谷口遺跡は、寺屋敷遺跡の200mほど南の河岸段丘上に位置し、1990年に発掘調査が行われている（三島・藤根2001）。縄文時代・平安時代・中世の遺物が出土しているが、遺構は平安時代の土坑墓を1基確認しただけである。出土した灰釉陶器は、寺屋敷遺跡のものよりもやや古い段階のものからある<sup>3)</sup>。

山手宮前遺跡は、1992年～1993年に発掘調査を行い、縄文時代中期後葉の集落跡と中世の掘立柱建物跡群を検出している（小谷ほか1997）。縄文時代の遺構は、前期後葉の土坑が1基あるほか、ほとんどが中期後葉のものであるが、遺物は早期から晩期のものまで出土している。なお、中世の掘立柱建物跡群は、民家の可能性が指摘されている。

尾元遺跡は、2000年に発掘調査を行い、縄文時代早期末から中期の集落跡であることが判明した（春日井2003）。また、平安時代の水場遺構を検出している。出土した遺物は、縄文時代早期から晩期、平安時代から近世のものがある。山手宮前遺跡や上原遺跡とは、直線距離で300m～400mの位置にあり、揖斐川を挟んで対岸にある。どちらの遺跡とも時期的に重なる部分があり、何らかの関連性があるものと考えられている。

上原遺跡は、1990年～1993年に発掘調査を行い、縄文時代前期から晩期の集落跡であることが判明した（河村ほか1997、堀田ほか2000）。遺構・遺物量とともに塚奥山遺跡と並び、徳山地区最大級の縄文時代遺跡といえる。また、奈良・平安時代の遺構・遺物を検出している。上原遺跡が営まれた河岸段丘は、徳山地区内では最も広い面積を有するが、近世以降集落が形成されたことはなく、この最大の要因を水利面での不便さとしている。また、段丘面は高位・中位・低位の3段に区分され、発掘調査では、第3地点が高位段丘面に、第1・第2・第4・第5地点が中位段丘面に、第6地点が低位段丘面に設定されている。

これらの遺跡を時期毎に概観する。縄文時代早期の遺構は、焼窯集積遺構が主体で、尾元遺跡の早期末の堅穴住居跡のほかは検出されていない。遺物も少量の出土が確認できるだけといった遺跡が多い。早期には、少ないながらも各遺跡で遺物が確認できたものが、前期後葉から中葉になると遺物が出土している遺跡は減少する。これが前期後葉になると、上原遺跡で10軒、尾元遺跡で3軒の堅穴住居跡や墓坑などが検出され、集落を構成するようになる。山手宮前遺跡よりも上流側では、これまでのところ前期後葉の遺物出土量は少なく、遺構も不確実である。

中期前葉は、再び遺跡数が少なくなる時期で、中葉から増加が始まり後葉にいたって各所に集落遺跡が確認できるようになる。後期から晩期にかけては、検出されている遺構・遺物量が減り、弥生時代に至っては、若干の遺物出土が報告されているだけである。さらに古墳時代に関しては、何も確認できていない。

奈良時代では、上原遺跡で土坑が検出されているだけで、平安時代に入ってようやく遺構・遺物の出土が各遺跡で認められるようになる。平安時代の建物遺構として確認されているのは、寺屋敷遺跡

の礎石建物跡や上原遺跡第2地点・第3地点<sup>1)</sup>の掘立柱建物跡である（図7）。礎石建物跡は、礎石を持つ点や出土遺物の特異性などから、宗教関係施設である可能性が考えられるが、上原遺跡の掘立柱建物跡は、その性格については明確にされていない。しかし、上原遺跡では徳山地区の中でこの時期の遺物出土量が最も多く、集落遺跡の可能性が考えられる。また、尾元遺跡の水場遺構の存在は、近くに集落が存在したことをうかがわせる。中世以降では、山手宮前遺跡で集落跡と思われる掘立柱建物跡群を検出したほか、土坑が少量認められるだけである。古代以降の出土遺物で特徴的なことは、煮炊きに用いられる土師器の壺・鍋・釜といった器種が非常に少ない点である<sup>2)</sup>。「10世紀に至ると、鉄製煮炊具の普及は列島規模で階層を越えて進行したようである。」（宇野1996）といわれる状況から、徳山地区のような山間部まで鉄製煮炊具が普及していたと考えるのが妥当であろうが、遺存しにくい上に、今までの発掘調査による出土例もなく、確証は得られていない。

これまでの発掘調査では、縄文時代の遺跡は、遺構・遺物とも多く検出されているが、弥生時代以降は遺構・遺物とも希薄となる。古代から中世では、集落跡と思われる遺跡を確認できるもののその数は少ない。なお、福井県大野市・岐阜県根尾村・藤橋村にまたがる能郷白山は、白山を中心とした山岳修験の靈場の一つと位置づけられており、徳山地区内にも「本郷」・「櫛原」・「塚」に白山神社が建てられていた。「徳山村史」（徳山村役場1973）では、「櫛原」・「塚」の白山神社は1340（興国元）年に創建されたとしているが、能郷白山神社付近では平安時代の遺物が採集されており（宮本1997）、徳山地区において平安時代に白山信仰に関わる活動が行われていた可能性は、十分に考えられるのではないか。

- 1) 途中、自然災害などにより中断された期間を含む。
- 2) 現在、整理途中であり、これまでに報告された調査概要（岐阜県文化財保護センター 1997・1998・1999）による。
- 3) 報告者の三島誠による。
- 4) 報告者は、第3地点のものは掘立柱建物跡とは断定しておらず、ピット群として報告している。しかし、複数回の立て替えを行った掘立柱建物跡の可能性は捨てきれないとしている。このためここでは、一応掘立柱建物跡として扱った。
- 5) 小野本学（当センター）によれば、平安時代から中世において、岐阜県美濃地方での発掘調査例からは、土製煮炊具が出土土器に占める割合は非常に少なく、数%以下の遺跡が大半のことである。

## 第3章 調査の結果

### 第1節 基本層序

この遺跡は、尾根先端部の緩斜面に位置しており、尾根上部から供給される土層の堆積が見られる。調査区の中央部分は、旧地形がわずかに谷状に窪んでおり、ここには厚く土層が堆積しているが、東部と西部のやや高いところでは、土層の堆積は少ない。これは、平安時代の土地利用に関わり、また、近年の開墾による段切り造成の影響も少なくないと思われる。このため、調査区中央部以外では、表土層の下にⅡ層～V層が層序通りに確認できないところがあった。

基本層序は、確認調査において最も土層が厚く堆積していたTR-1の層序をもとにⅠ層からVI層を設定した(図3)。なお、確認調査の時に礎石建物跡の可能性を想定した集石遺構(発掘調査でのSI-2)は、整地層の上に設置された可能性があると考えた。しかし、発掘調査では、平安時代の建物跡に関連した整地層を明確にすることはできなかった。なお、遺構がどの層に属するかを「長原遺跡Ⅲ」(趙1983)を参考にし、「○層上面」「○層基底面」と呼称することによって表した。層序通りに土層の堆積が確認できるところでは、検出した土層の上面の遺構と呼び、そうでない場合は、遺構を検出した面の上に堆積した土層の基底面の遺構とした(図8)。

以下に基本層序のⅠ層から順に概述する。

#### I a層(黒褐土層、角礫・炭化物を含む)

表土層、徳山村の廃村まで利用された畑の耕作土である。

#### I b層(黒褐土層、角礫・炭化物を含む)

開墾の時に行われた段切り造成により、斜面を平坦にするために盛られた土層。

#### II層(黒褐土層、亜円礫・角礫・炭化物を含み、小石多い)

古代以降の遺物包含層。灰釉陶器や土師器などが出土している。

#### III層(黒褐土層、小石を含む)

平安時代遺構が形成される以前の遺物包含層。この上面で平安時代の遺構(掘立柱建物跡や土坑など)を検出した。

#### IV層(黒土層、小石を含む)

縄文時代の遺物包含層。

#### V層(黒褐土層、角礫を含む)

少量の土器小片が出土していることから、縄文時代に堆積した土層と思われるが、縄文時代の遺構として検出した土坑は、この層の上面から掘り込まれていた。

#### VI層(褐粘質土層)

遺跡基盤層、V層との境界に近い部分では、土色が暗褐色へと漸移的に変化している。調査区への進入路の崖における土層観察では、VI層下に白色粘土層があり、さらにその下は岩盤となっていた。調査区内においてもC-2区のあたりでは、表土を除去すると部分的に白色粘土層が露出していた。

## 第2節 遺構・遺物の概要

### (1) 遺構概要

調査で検出した遺構には、縄文時代・平安時代・中世以降のものがある。これらの遺構は、層位的に検出できたものもあり、また、土層の堆積状況により同じ面で複数時期の遺構を検出した場合もある。これらの層位的な差異については、遺構検出面の呼称により行った(図8)。

遺構の時期決定は、検出した層位や遺構内部から出土した遺物により判断したが、「○層基底面」の遺構としたもので、遺物が伴わない場合には、その土層の堆積時期よりも古いとしかいえない。

遺構番号は、下記の略号を用い、通し番号を発掘調査時に付けた。ただし、発掘調査では、原則として土坑と柱穴の区別をせず<sup>1)</sup>、「SK」の略号を用いて番号を付け、整理時に必要に応じて番号を付け直す方法をとった。このため建物跡の柱穴・礎石については、発掘調査時は「SK」として番号を付けていたため、整理時に新たに番号を付け直し、現場で使用した番号を欠番とした。

遺構略号 SH - 建物遺構 SK - 土坑(穴) SF - 烧土 SD - 溝状遺構 SI - 集石遺構

SP - 掘立柱建物跡柱穴 SS - 礎石・礎石掘形

### 平安時代及び中世以降の遺構

縄文時代と思われる遺構を除いたものを、この時期の遺構として扱った。礎石建物跡1棟、掘立柱建物跡1棟、集石遺構2基、土坑106基、溝状遺構3基を検出した。礎石建物跡と掘立柱建物跡は、礎石掘形内と柱穴内から灰釉陶器が出土しており、平安時代の遺構と考えられる。また、集石遺構については、Ⅲ層上面で検出したことから、やはり平安時代の遺構と判断した。時期不明としたI層基底面やII層基底面で検出した土坑については、遺物を伴わないものが多く、縄文時代まで遡るかもしれないが、逆に平安時代よりも新しいものであるとも考えられるが、判断材料を欠く。なお、SK64は、埋土中から出土した炭化物の年代測定により、中世の遺構である可能性が高い。また、SD1は、重機による表土除去時に、II層上面において確認できたことから、中世よりも新しい時期の遺構で、開墾に伴う段取り造成による切り土部分が、溝状に検出したものと判断した。

### 縄文時代の遺構

この時期の遺構としたのは、Ⅲ層基底面(V層上面)で検出した遺構と、縄文時代の遺物を伴う遺構、トレンチ調査によりVI層上面で検出した遺構である。すべて土坑であるが、層位的に確認できたものはⅢ層基底面のSK113だけである。トレンチ調査においてVI層上面で検出した遺構は、一応この時期のものと考えたが、Ⅲ層上面での遺構確認時に見落としていた可能性を否定できない。

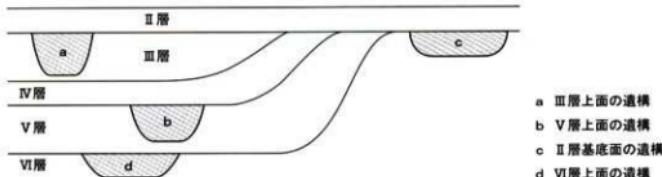


図8 遺構(調査)面模式図

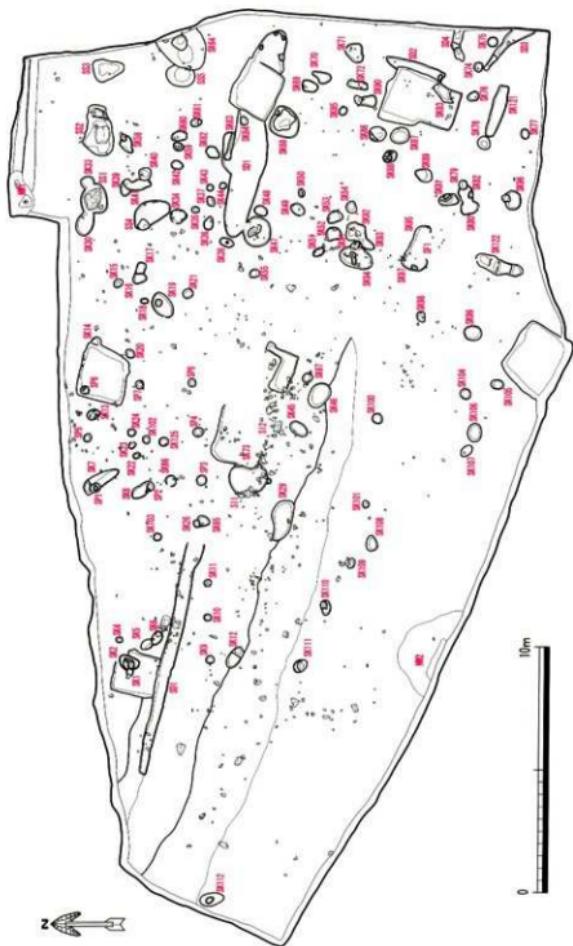


図9 遺構配置図 ( $S=1/200$ 、トレンチ調査による検出遺構を除く)

表2 層位別遺構数一覧

検出遺構面	掘立柱建物跡	礎石建物跡	土坑	焼土	溝状遺構	集石遺構	合計
I層上面			37		3		40
II層上面			3		1		4
II層基底面		1	34				35
III層上面	1		33			2	36
III層基底面			1				1
VI層上面			3	1			4
合計	1	1	111	1	4	2	120

1) 長野県茅野市立石遺跡（小池・柳川1994）における土坑の呼称方法を参考にした。ただし立石遺跡では「穴」と呼称している。

### (2) 遺物概要

出土した遺物は少ないが、縄文時代と平安時代のものがある。平安時代のものとしては、土師器・灰釉陶器などが出土しているが、灰釉陶器には漆が付着した椀や皿がある。縄文時代では、早期と中期の土器や石器類が出土している。縄文土器は、早期の押型文土器が1点ある他は、中期前葉の土器

表3 土器類出土量

古代の土器	灰釉陶器					土師器	土製品			小計	合計	
	椀	皿	壺類	不明	小計		鉢	鉢状	不明			
破片数	26	15	1	8	50	2	1	4	7	57		
%	45.61	26.32	1.75	14.04	87.72	3.51	1.75	7.02	12.28	100		
個体数 (x/12)	17.4	17.2	0	1	35.6	0	2	0	2	37.6		
%	46.28	45.74	0.00	2.66	94.68	0.00	5.32	0.00	5.32	100		
質量 (g)	296	182.3	9.5	32.1	519.9	4.1	156.2	102.8	263.1	783		
%	37.80	23.28	1.21	4.10	66.40	0.52	19.95	13.13	33.60	100		
全土器類	縄文土器	土師器類	灰釉陶器	近世以降	合計	鉢	鉢状	不明	合計			
破片数	32	2	50	3	87	1	28	3	32			
%	36.78	2.30	57.47	3.45	100	%	3.10	87.50	9.40	100		
個体数 (x/12)	6	0	35.6	2	41	0	5	1	6			
%	13.76	0.00	81.65	4.59	100.00	%	0.00	83.30	16.70	100		
質量 (g)	482.5	4.1	519.9	5.7	1012.2	20.5	449	13	482.5			
%	47.67	0.41	51.36	0.56	100	%	4.20	93.10	2.70	100		
灰釉陶器	椀	皿	壺類	不明	計	鉢	鉢状	土製品	計			
破片数	26	15	1	8	50	2	1	4	7			
%	52.00	30.00	2.00	16.00	100	%	28.57	14.29	57.14	100		
個体数 (x/12)	17.4	17.2	0	1	35.6	0	2	0	2			
%	48.88	48.31	0.00	2.81	100	%	0	100	0	100		
質量 (g)	296	182.3	9.5	32.1	519.9	4.1	156.2	102.8	263.1			
%	56.90	35.10	1.80	6.20	100	%	1.56	59.37	39.07	100		
近世以降の土器	壺	不明	計									
破片数	1	2	3									
%	33.3	66.7	100									
個体数 (x/12)	1	1	2									
%	50	50	100									
質量 (g)	2.9	2.8	5.7									
%	50.9	49.1	100									

\*破片数は、接合前のもの。

\*口縁部残存率は、x/12とし、1/12よりも小さなものは、1/12に切り上げた。

片と少量の時期不明の無文土器片である。石器類は、早期と思われる異形石器の他、石匙・石皿・凹石などがある<sup>2)</sup>。

土器類の出土量は表2にまとめ、接合前の破片数・個体数<sup>3)</sup>・質量を併記した。さらに土器の種類毎に、時期あるいは器種別に出土量を記載した。量的に最も多いのは、遺構数に比例して古代の土器である。破片数で60%、個体数で80%、質量で60%を越えている。

縄文土器では、早期の土器は1点のみ確認できただけで、大半が中期前葉の土器である。古代の土器では、灰釉陶器の椀・皿が破片数で80%以上となっている。

石器類は、総数26点出土しているが、定型的な石器の中では打製石斧と石錐が複数個出土している他は、すべて1点ずつの出土である（表3・図10）。

遺物の出土分布（図11）は、縄文時代中期前葉の土器が、SK47とその周間に集中する他は、際だったまとまりは認められない。しかし、調査区の北部・東部で遺物があまり出土していないのは、開墾の際の段切り造成に伴う切り土の影響が大きいものと思われる。

2) 古代以降の土器に関しては渡辺博人氏の指導を受けたほか、小野木（当センター）の助言を得た。また、石器の器種認定に関しては大下明氏の指導を受けたほか、石材同定を含めて浅野哲男氏や三島（当センター）の助言を得た。なお、灰釉陶器の年代観は、齊藤孝正氏の編年（齊藤1995）を参考にした。

3) 個体数の計測方法は、口縁部計測法（宇野1992）を用いた。

表4 石器類器種別数量

器種名	石匙	打製石斧	異形石器	叩石	石錐	石皿	RF	MF	フレイク	合計
数量	1	4	1	1	3	1	3	5	7	26
割合(%)	3.8	15.4	3.8	3.8	11.5	3.8	11.5	19.2	26.9	99.7

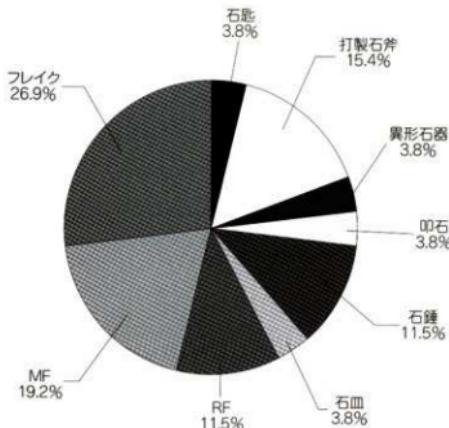


図10 石器組成グラフ

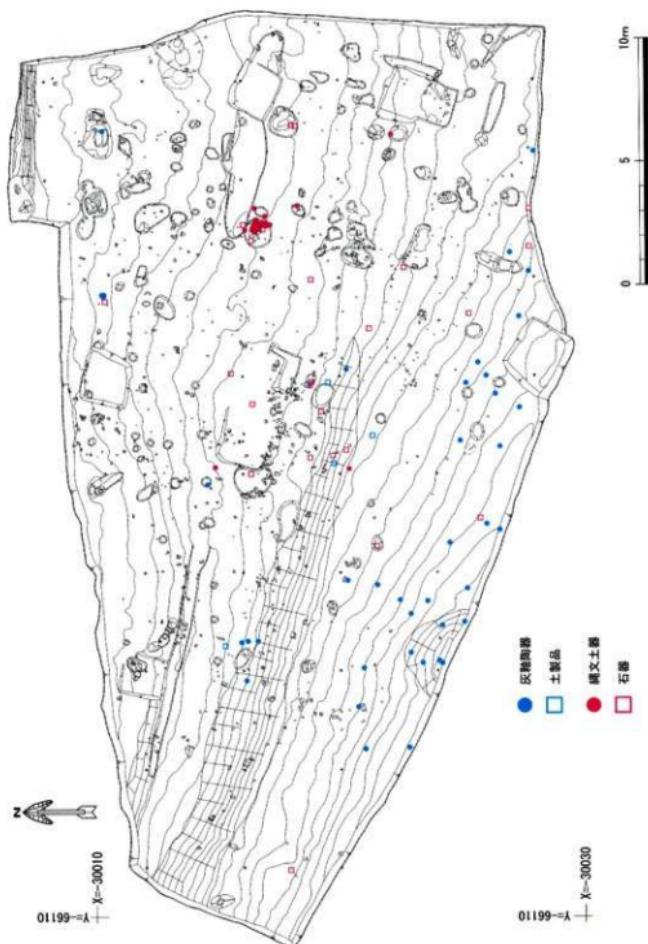


図11 遺物出土分布図 ( $S = 1/200$ )

## (3) 遺構一覧表、遺物觀察表、遺物実測図について

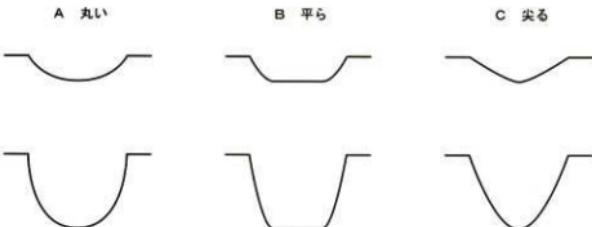
## 遺構一覧表

○遺構の検出層位は、基本層序と検出面で表し、Ⅲ層上面で検出した遺構の場合「Ⅲ上」、VI層上面で検出したが、その上に堆積していたのがⅡ層（Ⅱ層基底面検出）だった場合「Ⅱ基」などと表記した。

○遺構の規模の単位はmであるが、（ ）で示したものは、全形が確認できなかったため、残存長を測ったものである。

○土坑断面形は、断面の形状（A～C）と、上面での短軸長と深さとの比（1～6）、底面（a～c）と壁面（1～3）の状況の4つの文字で表示した。

## 底面の形状の模式図



深さ／上面での短軸長 1 - 0.3未満 2 - 0.3～0.7未満 3 - 0.7～1.1未満 4 - 1.1～1.5未満  
5 - 1.5以上 6 - 不明

底面の状況 a - 丸いか平らのまま b - 底が2段になる c - 底面が凸凹

壁面の状況 1 - 壁が開く 2 - 壁が直立に近い 3 - 壁面に段がある

○遺構の切り合いは、「新>古」の関係を示す。

○遺構の埋里土は、堆積状況を次のように表示した。

A - 埋土が單一層 B - ほぼ水平な堆積 C - 中央がU字状に凹むような堆積 D - 凹みが偏った堆積 E - ブロック状に土層が入り込む堆積 F - 最上層が掘り込んだ状態となるもの G - 柱根状の土層があるもの H - その他

## 土器觀察表

○「No」は、本文中の通し番号、「整理No」は、発掘調査において遺物を取り上げた際の登録番号である。

○「地区・遺構」は、遺物が出土した調査区画もしくは遺構で、複数の地区や遺構から出土した遺物が接合した場合には、複数の地区や遺構を記入している。

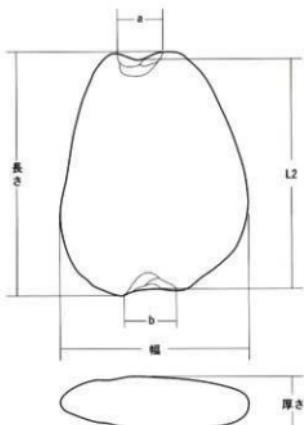
○「層位」は、包含層出土の場合基本層序番号（I・IIなど）を、遺構出土の場合埋土の土層番号（1・2など）を記入した。

○「口径」・「器高」・「底径」の単位は、cmである。

- 「残存率」は、口縁部残存率 ( $x/12$ ) を計測した（宇野1992）もので、 $1/12$ 以下については $1/12$ に切り上げた。
- 「胎土」に記載した含有物は、肉眼で識別したものである。
- 「色調」は、外面／内面／断面の順に色名を記載したが、いずれも同色の場合は区分をせず、色名を一つだけ記載した。

#### 石器観察表

- 「石材」の鑑定は、肉眼観察により行った。
- 「長さ」・「幅」・「厚さ」の単位はcmである。また、「質量」の単位はグラムである。「刃角」の単位は度であるが、小数点第1位以下は切り上げた。
- なお、欠損している場合は、( ) 内に残存値を記入した。
- 打欠石錐の計測値は、渡辺誠氏の提唱（渡辺誠ほか1985）を参考とし、右図の位置で計測した。なお、切目石錐に関しても、同様に計測した。
- 石錐の残存度は、完形品の場合「完」、欠損品の場合はその割合を示した。
- 摩耗痕や線状痕の有無は、ルーペ ( $\times 10$ ) により行った。



石錐計測部位説明図

#### 遺物実測図

- 遺物の断面図は、縄文土器を黒塗り、灰釉陶器を白抜きとし、土製品はスクリーントーンを貼った。
- 石器実測図中のスクリーントーンは、摩耗痕の範囲を、実線は線状痕の方向を表している。また、石器や剥片の側縁に微細な剥離痕を観察した場合は、その範囲を平面図の横に示した。

### 第3節 中世以降

中世以降のものと確定できる遺構は、Ⅱ層上面で検出した土坑3基と溝状遺構1基、そして、放射性炭素年代測定（第4章第1節）により16世紀代の値が算出された土坑1基の計5基である。

**溝状遺構（SD 1）** 調査区の中央部で検出した遺構であるが、表土を除去した段階（Ⅱ層上面）で確認でき、現地形での段差と平行していることから、開墾に伴う段切り造成の切り土部分が、溝状に掘なっていたものと判断した。遺物は出土していない。

**土坑** SK 7とSK 8、SK23は、表土を除去した段階（Ⅱ層上面）で確認できたため、中世以降のものと判断した。いずれも遺物は出土しておらず、性格についても不明である。SK 7とSK 8は、獨立柱建物跡の柱穴であるSP 1とSP 2にそれぞれ重複している。SK23は、埋土中に炭化物を多く含む。

SK64は大型の深い土坑で、底面に段差をもつ。埋土中に礫が多く含まれており、形状から落とし穴のような用途を想定したが断定できなかった。埋土中から出土した炭化物による、放射性炭素年代測定結果からは、16世紀代の遺構と思われる。遺物は出土していない。

表5 中世以降の土坑一覧

遺構番号	地区	検出層位	平面形	規模(m)				断面形	切り合ひ関係	埋土	出土遺物	時期					
				上面		底面											
				長軸	短軸	長軸	短軸										
SK 7	E 2	Ⅱ層上面	長楕円形	1.47	0.52	1.40	0.40	0.07	B1a1 > SP1	1層 A	10YR 2 / 2 黒褐色土	なし	中世以降				
SK 8	E 2 / E 3	Ⅱ層上面	長楕円形	1.00	0.49	0.94	0.41	0.22	B2a2 > SP2	2層 H	①10YR 2 / 2 黒褐色土 ②10YR 2 / 2 黒褐色土 (明色)	なし	中世以降				
				0.29	0.23	0.21	0.18	0.11			7.5YR 2 / 1 黒土、炭 多量に含む						
SK23	F 2	Ⅱ層上面	楕円形	(1.79)	1.73	(0.7)	0.61	1.22	B2a1	なし	1層 A	なし	中世以降				
SK64	J 3	I 基 (VI 層上面)	楕円形	(1.79)	1.73	(0.7)	0.61	1.22	A3b1	> SS5	8層 C	図11参照	なし 中世				



図12 SK64 (S = 1/50, L = 370.5m)

#### 第4節 平安時代

平安時代と思われる遺構は、Ⅲ層上面で検出した掘立柱建物跡1棟、土坑27基、集石遺構1基、灰釉陶器が出土した礎石建物跡1棟である。しかし、表土除去後Ⅱ層上面では遺構検出作業を十分には行っていないため、Ⅲ層上面で検出した遺構の中に、上層から掘り込まれたものが含まれる可能性がある。なお、焼土や土坑の時期不明のものも便宜的にここに含めた。

##### (1) 磚石建物跡（図13・表6）

**検出状況** 調査区の北東部で検出した、桁行1間以上（2.7m以上）×梁行2間（5.4m、1間2.7m）の礎石建物跡である。桁行方向の軸は、北から5° 東に傾く。この北側は傾斜の強い斜面となるが、北側の礎石列から2.5mの位置までは斜面の裾部を削り、平坦地を造りだしている。南に向かって緩やかに傾斜しているため、南側には盛土をして平坦地を広げているものと思われるが、調査では確認できなかった。検出した礎石は2基だけであるが、この部分には山側からの土砂が厚く堆積していた。しかし、他の3基の礎石掘形を検出した部分では、表土下がすぐにⅥ層となっており、開墾や耕作に

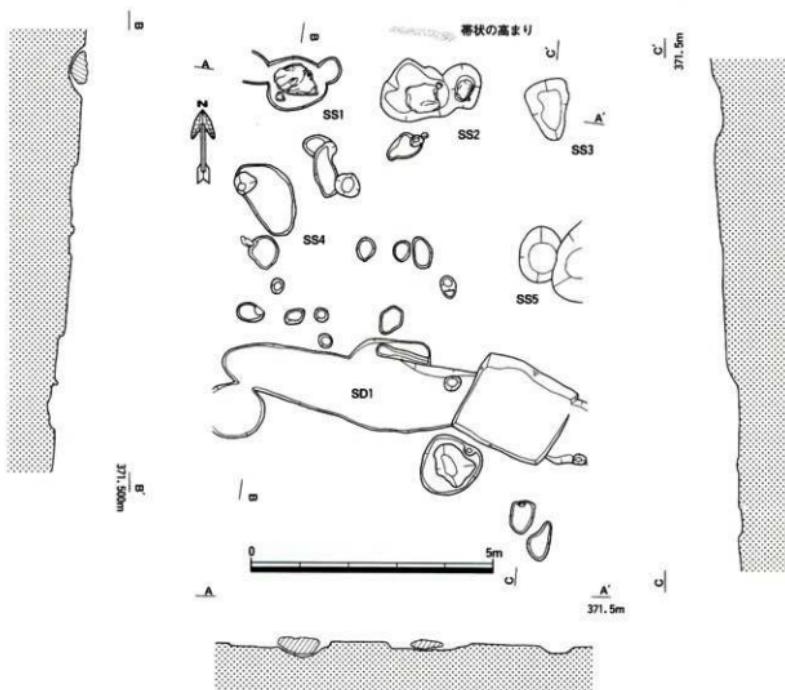


図13 磚石建物跡 (S=1/100)

表6 磐石掘形一覧

遺構番号	地図	検出層位	掘形規模 (m)						断面形	切り合ひ	埋土	出土遺物	備考	
			平面形		上面		底面							
			長軸	短軸	長軸	短軸								
SS1	H 2	II 基	不整円形	1.2	1.03	1.12	0.96	0.3	A1al	< SK30·33	1 層 A	7.5YR 2 / 1 黒土、やや茶色、やや縮まる、炭少しづる、径 5 cm 以下の亜角礫含む	なし	礎石あり
SS2	I 2	II 基	不定形	2.04	1.25	1.9	0.83	0.15	B1al	なし	2 层 C	17.5YR 2 / 1 黒土、やや縮まる、やや粘質、径 3 cm 以下の亜角礫含む 27.5YR 2 / 2 黒褐色土、やや縮まる、やや粘質、径 3 cm 以下の亜角礫含む	灰釉陶器	礎石あり
SS3	J 2	I 基	不整格円形	1.23	0.88	0.81	0.45	0.17	B1al	なし	1 层 A	10YR 2 / 2 黒褐色土、縮まりなし、径 5 cm 以下の亜角礫含む	なし	掘形のみ
SS4	H 2 / H 3	II 基	不整長格円形	1.64	0.94	1.59	0.85	0.2	B1al	なし	1 层 A	7.5YR 2 / 1 黒土、やや縮まる、径 5 cm 以下の亜角礫含む	なし	掘形のみ
SS5	I 3 / J 3	I 基	長格円形	(1.15)	(0.65)	(0.80)	(0.57)	0.03	B1al	なし	1 层 A	10YR 2 / 2 黒褐色土、縮まりなし、径 5 cm 以下の亜角礫含む	なし	痕跡程度

よる影響で、礎石自体は取り除かれてしまったものと判断した。また、その南側には、開墾時の段切り造成による SD 1 があり、このため南側については、平坦地を広げるための盛土や礎石掘形まで削られていたものと思われる。礎石建物であることから、仏堂的な宗教施設の可能性が高いと思われる。建物規模は、西を正面とした 3 間 × 2 間程度の南北棟を想定したい。

**礎石** 磎石及び礎石掘形には、SS 1～SS 5 の番号を付した。このうち礎石が残っていたのは SS 1 と SS 2 で、扁平な川原石の平坦な面を上に向け、高さをそろえて据えている。SS 1 の礎石は、長さ 0.97m、幅 0.67m、厚さ 0.36m の扁平な亜円礫である。SS 2 の礎石は、長さ 0.68m、幅 0.58m、厚さ 0.17m の扁平な亜円礫である。この礎石の北側にはやや小振りの扁平な亜円礫が掘形を伴って置かれていたが、礎石建物に付随するものか否か不明である。また、この北側には、高さ 2 ～ 3 cm ほどの非常に堅く縮まった高まりを帯状に確認したが、これについても性格は不明である。SS 3～SS 5 は、SS 1 や SS 2 との位置関係や形状の類似点から礎石掘形と判断した。SS 3 と SS 5 は、1999 年の確認調査時に検出しているが、このときには埋土が表土層と区別できないものであったため新しい穴と認識していた。しかし、礎石が取り除かれた時期が開墾や耕作に伴うものと思われることから、礎石を取り除いてできた穴に表土層が入り込んだものと解釈できる。

**出土遺物（図14）** 1 は、SS 2 の礎石を除去したところ、掘形内から出土した灰釉陶器碗の底部片である。高台はやや長く、底部から体部外間に回転ヘラ削り調整が施されており、折戸 53 号窯式の古

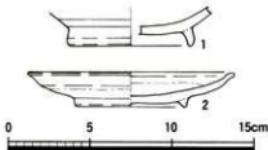


図14 SS2 及び礎石建物跡西側出土遺物



写真3 磎石建物跡西側出土遺物出土状況

い段階のものと思われる。内外面には漆が付着しており、割れ面にまで及んでいることから、破損後に付着したものと思われる。2は灰釉陶器折縁皿で、礎石建物跡内から出土したわけではないが、SS 1の3m西の地点の包含層中から出土したものである。細かく割れた破片が、集められたような状態であった。屈曲した口縁部の内面に稜が明瞭に残るが、底部はヘラ削り調整がされていないことから、折戸53号窯式の新しい段階のものと思われる。この灰釉陶器にも内外面や割れ面に漆が付着しているが、他の漆が付着した灰釉陶器と比較して、漆が厚くほぼ全面に認められる。

**時期** 構築時期としては、SS 2から出土した折戸53号窯式の灰釉陶器を目安として、10世紀前半代と思われる。

## (2) 堀立柱建物跡（表7・図15）

**検出状況** 調査区の北部中央で検出した、桁行2間（4.4m、柱間2.3m・2.1m）×梁行2間（4m、1間2m）の堀立柱建物跡である。桁行方向の軸は、北から5°西に傾いており、礎石建物とはやや方位が異なる。この北側は、傾斜の強い斜面となっており、建物が北側に延びる可能性はないと思われる。建物跡は、南に向かって緩やかな斜面に位置することから、盛土をして平坦地を造り出していった可能性が考えられるが、調査では盛土を確認することはできなかった。なお、堀立柱建物跡の南側には、集石遺構が位置しており、盛土に関連する可能性が考えられるが、調査では明らかにすることができなかった。なお、南北の柱穴の検出面での高低差は約0.6mある。

**柱穴** 8基の柱穴を検出し、SP 1～SP 8の番号を付した。このうち柱痕跡を確認したのはSP 3とSP 4、SP 5である。さらにSP 3とSP 4では、底面に柱が当たっていた痕跡が円形の凹みとして確認でき、そこだけ固く縮まっていた。柱穴の規模は、径0.25m～0.4mで、深さは0.34m～0.72mである。山側に位置するSP 1が最も深い柱穴で、SP 5やSP 6も底面での標高にあまり差がないこと

表7 堀立柱建物跡柱穴一覧

遺構番号	地区	検出層位	平面形	掘形規模（m）				断面形	切り合ひ	埋土	出土遺物	備考		
				上面長軸	下面短軸	上面長軸	下面短軸							
SP 1	E 2	SK7 底面	楕円形	0.4	0.32	0.14	0.1	0.72	B5a2	<SK7	2層 B	①10YR 3 / 3暗褐色質土、縮まる、径10cm以下の亜角離合む ②10YR 3 / 3暗褐色質土、やや縮まる、VI層アロケ混、径30cm以下の亜角離少し含む	なし	
SP 2	E 2～E 3	SK8 底面	円形	0.28	0.25	0.21	0.17	0.45	B5a2	<SK8	1層 A	10YR 2 / 1黒土、縮まりなし、径5cm以下の亜角離少し含む	なし	
SP 3	E 3	Ⅲ上	円形	0.35	0.33	0.22	0.18	0.35	B3a2	なし	3層 G	図15参照	灰釉陶器を変更	
SP 4	F 3	Ⅲ上	円形	0.36	0.34	0.25	0.2	0.34	B3a2	なし	2層 G	図15参照	SK28を変更	
SP 5	F 2	Ⅱ基	円形	0.34	0.3	0.23	0.21	(0.38)	B4a2	なし	2層 G	図15参照	SK117を変更	
SP 6	F 2	Ⅱ基	円形	0.33	0.32	0.22	0.2	(0.20)	B2a2	なし	？ ？	平成6年度試掘調査時完掘	SK118を変更	
SP 7	F 2～F 3	Ⅱ基	楕円形	0.35	0.29	0.19	0.18	(0.22)	B2a2	なし	2層 B	①7.5YR 2 / 1黒土、やや縮まる、径3cm以下の亜角離合む ②7.5YR 3 / 2黒褐色土、やや縮まる、やや粘質、径10cm以下の亜角離多く含む	なし SK119を変更	
SP 8	F 3	Ⅱ基	円形	0.33	0.33	0.2	0.2	(0.37)	B4a2	なし	3層 B	図15参照	なし SK120を変更	

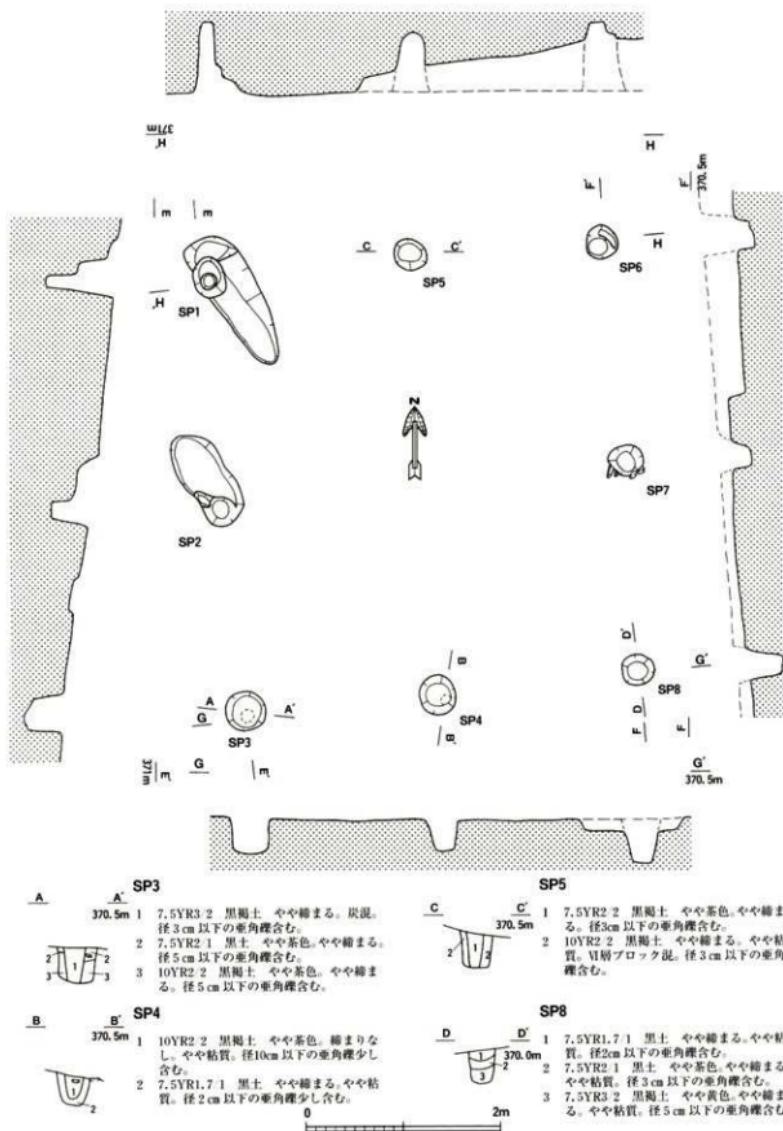
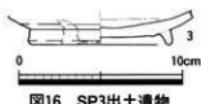
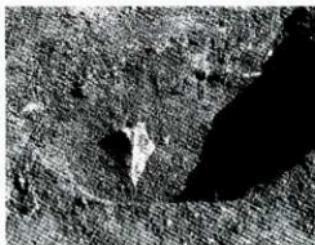


図15 挖立柱建物跡 (S=1/50)



から、同様の深さのものであったと思われる。また、柱痕跡や底面の円形の凹みの大きさから、柱の太さは径13cm程度のものと思われる。

**出土遺物（図15）** 3は、SP 3の埋土中から出土した灰釉陶器碗の底部片である。検出面から数cm掘り下げた段階で、柱痕跡の外側（土層図の2層）から出土していることから、柱を埋めた際に混入したか、入れられたものと思われる。高台はやや短く外に開いているが、底部から体部外面にヘラ削り調整が施されており、折戸53号窯式の古い段階のものと思われる。高台には墨痕状の黒い染みのようなものが認められ、内面の状態は非常に滑らかになっている。

**時期** 構築時期としては、SP 3から出土した折戸53号窯式の灰釉陶器を基準として、10世紀前半代と思われる。

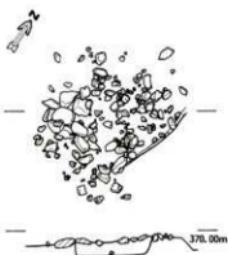
### (3) 集石遺構（図17・18）

調査区の中央部、掘立柱建物跡の南側において検出した。SI 1とSI 2として遺構番号を付けているが、一連の遺構と見ることもできる。

**SI 1** E 4区に位置する集石で、II層掘削時から礫がまとまって出土し、III層上面で2.1m×2.1mの範囲に亜円礫と亜角礫が集積された状態であった。肉眼で観察したところ、礫に被熱した痕跡は確認できなかったが、集石内の土には炭化物が包含層中と比較して多く認められた。礫は、亜円礫よりも亜角礫の方が多く含まれていた。また、礫を除去したところ、不整椭円形の土坑（SK73）を検出した。集石内から遺物は出土していないが、層位的に平安時代のものと判断した。

**SI 2** E 4区～G 4区に位置する集石で、SI 1と同様にII層掘削時から礫がまとまって出土し、III層

集石遺構（SI1）



SK73（SI1下部）

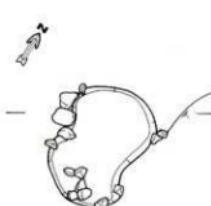


図17 SI1・SK73 (S=1/50)

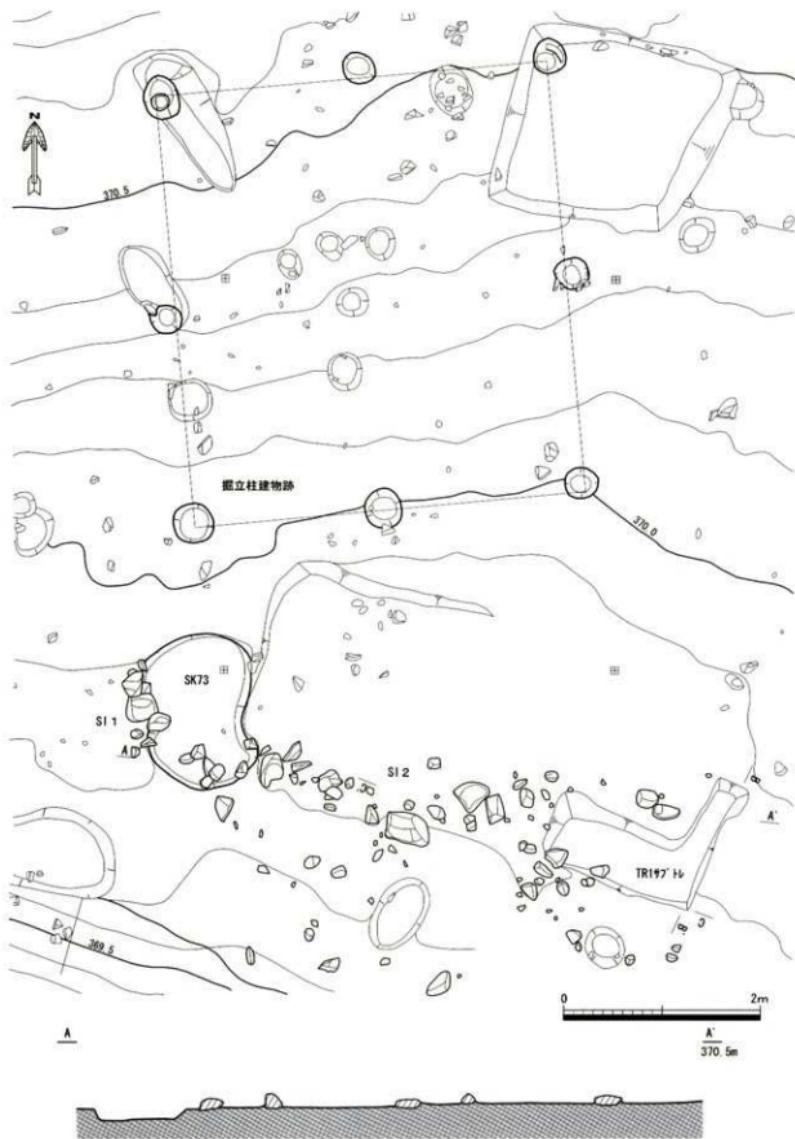


図18 SI 2 及び掘立柱建物跡 (S = 1/50)

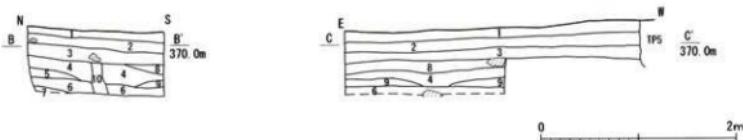


図19 TR 1 東壁・南壁土層図 (S=1/50、位置は図18のB-B'、C-C')

1 10YR2/2 黒褐土 (Ia層)。表土、小石多く含む	6 10YR2/3 黒褐土 (V層)。角礫含む
2 10YR2/2 黒褐土 (Ib層)。より暗色、角礫・小石多く含む	7 10YR4/6 極粘質土 (VI層)。角礫多く含む、基盤層
3 7.5YR3/1 黒褐土 (II層)。角礫多く含む	8 7.5YR2/2 黒褐土、やや暗色
4 7.5YR2/2 黒褐土 (III層)。小石多く含む	9 7.5YR2/1 黒土 (IV層)。やや茶色
5 7.5YR1.7/1 黒土 (IV層)。小石含む	10 植物の根跡

上面で4.3m×1.3mの範囲に亜円蝶と亜角蝶が帶状に集積された状態であったが、SI 1と比較して蝶は少ない。肉眼で観察したところ、蝶に被熱した痕跡は確認できなかった。SI 2の西端は、SI 1に接しており、SI 1とSI 2は一連の造構とも考えられる。この集石は、1999年の確認調査の時に一部を検出しているが、この時点では集石造構という認識はなかった。確認調査のトレント1 (TR 1) の東壁と南壁土層断面 (図19) では、II層とIII層の間に黒褐土層 (III層に非常によく似ているが、色調は暗い色となる) を確認しており、この土層中にSI 2の蝶が含まれている。ただ、TR 1西壁土層断面では、この黒褐土層は確認できず、ごく限られた範囲にのみ堆積する土層との認識であった。このため発掘調査の際には、黒褐土層は帶状に出土する蝶を残しながら掘り下げ、III層上面で造構検出を行っている。しかし、掘立柱建物跡の南側に帶状に蝶がまとまり、その部分に堆積していた土はII層とIII層の間に堆積する異なるものであったことから、可能性としては、SI 2が盛土による整地層の南裾部に置いた蝶であったということも考えられる。発掘調査時点での認識不足により、調査の中で整地層の存在を把握することができなかっただため、明言することはできないが、SI 2の性格の一つとして想定しておきたい。なお、SI 2が整地に伴うものであったとしても、その上部にはII層が堆積しており、その後の土地利用によって大きく削平を受けているとは考えにくることから、掘立柱建物跡の床面は、傾斜したままであった可能性がある。集石内からは遺物は出土していないが、層位的に平安時代のものと判断した。

#### (4) 小土坑列 (表8・図20)

調査区中央西寄りのD 3区～E 3区で検出した。掘立柱建物跡の南側の柱穴であるSP 3・SP 4・SP 8の延長線上に並んでいることから、小土坑列として他の土坑とは区別した。西からSK 9、SK10、SK11、SK65とあり、掘立柱建物跡柱穴のSP 3へ続く。小土坑間の長さは、SK 9～SK10が1.7m、SK10～SK11が1.4m、SK11～SK65が2.5m、SK65～SP 3が1.7mとまばらであり、各小土坑の深さも掘立柱建物跡の柱穴と比べて浅い。また、直交する位置には同様の小土坑はなく、建物跡にはならないことから、掘立柱建物跡に付随する欄のようなものである可能性が考えられるが、柱痕跡も確認できていないことから断定はできない。各小土坑からは、遺物は出土していないが、層位的に平安時代のものと思われる。

なお、小土坑列の北側に3.5m離れた位置で、柱穴状のSK 4を検出したが、これに対応するような

表8 小土杭列一覧

造構番号	地区	検出層位	平面形	規模(m)						断面形	切り合 い関係	埋土	出土 遺物	時期	
				上面		底面		深さ							
				長軸	短軸	長軸	短軸								
SK9	D3	Ⅲ上	円形	0.33	0.3	0.25	0.2	0.23	A3a2	なし	2層	C	(1)7.5YR2-1 黒土、やや 縮まる、やや粘質、径3 cm以下の亜角繩少し含む。 (2)10YR3-2 黒褐色、や や縮まる、やや粘質、径 5cm以下の亜角繩含む	なし	平安?
SK10	D3	Ⅲ上	円形	0.29	0.25	0.26	0.22	0.09	B2a1	なし	1層	A	(1)10YR2-2 黒褐色、や や茶色、やや縮まる、や や粘質、径2cm以下の小 石少し含む	なし	平安?
SK11	D3	Ⅲ上	円形	0.3	0.29	0.13	0.12	0.16	B2a1	なし	1層	A	(1)7.5YR2-1 黒土、やや 縮まる、やや粘質、径1 cm以下の小石少し含む	なし	平安?
SK65	E3	Ⅲ上	不整 円形	0.49	0.43	0.38	0.37	0.18	B2a1	< SK26	1層	A	(1)10YR1.7-1 黑土、やや 茶色、やや縮まる、やや 粘質、径2cm以下の亜角 繩含む	なし	平安?

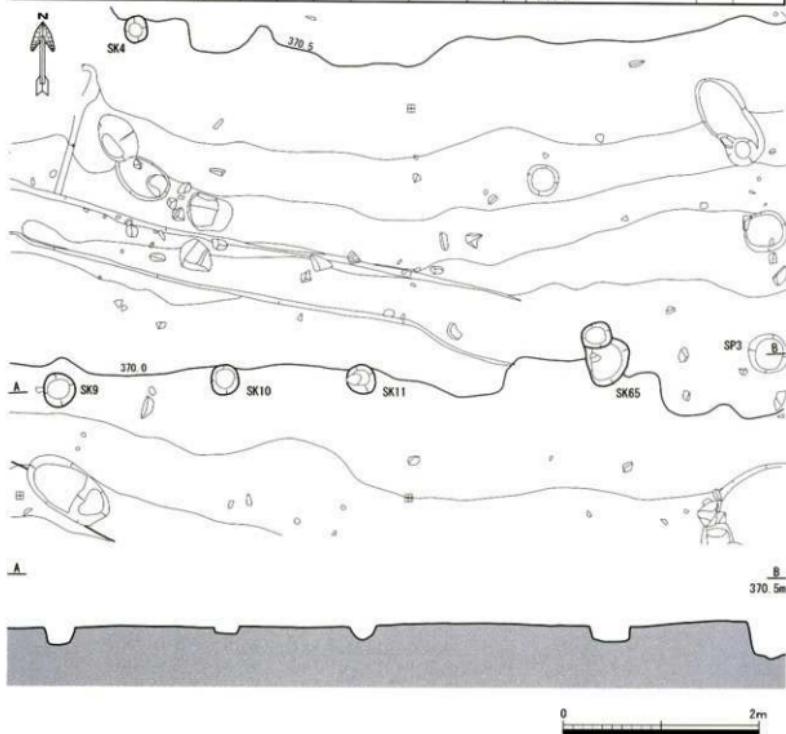


図20 小土杭列 (S=1/50)

小土坑は周間に確認できず、SK 4 の性格は不明である。また、遺物も出土していないことから時期も不明である。

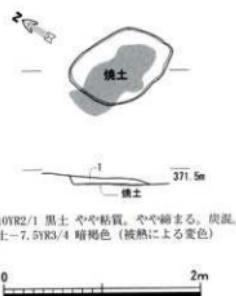


図21 燃土 (S=1/50)

### (5) 燃土 (図21)

調査区の西南部、H 5 区で検出した燃土である。SK95を掘削したところ、底面に赤く被熱した部分を確認したが、被熱部分はSK95外部にも延びていた。このため、SK95とは直接関係なく、燃土の方が古い時期のものと思われるが、遺物が伴っていないことから時期は不明である。被熱部分は、0.96m × 0.45m の範囲に及ぶものの、VI層が被熱によって変色しているだけで燃土層は明瞭には存在していないことから、SK95によって削平された可能性が高いと思われる。

### (6) 土坑 (図22~26・表9~11)

検出した土坑のうち、縄文時代と思われるもの以外の数は101基あるが、このうち中世以降と思われる土坑を除くと97基となる。さらに小土坑列の4基を除外した93基を表9~11に示した。遺物が出土した土坑は、SK67でフレイク1点であり、時期不明のものが多いが、Ⅲ層上面で検出した土坑は、平安時代の可能性が高いものとして、表中に「平安?」と記載した。

土坑は、ほぼ調査区内全域に広がるが、西部のA 2 区～C 5 区にかけては土坑が存在しない部分がある。また、礎石建物跡と掘立柱建物跡、SI 2 に囲まれた部分（区画杭G 4 の周囲）も土坑がない。土坑の分布する範囲は、掘立柱建物跡とその西から南側と、礎石建物跡とその南側とに大きく分けることができ、前者では円形や楕円形の平面形が多く、後者では不整円形や不整楕円形が多くなっており、土坑の位置により平面形が異なる傾向が認められる。また、土坑上面での長軸長や深さにおいても、前者よりも後者の方が大きく、浅い傾向がある。ただ、礎石建物跡からその南側にかけては、後世の削平の影響が大きいため深い土坑が多いとも考えられる。こうした違いがどのような理由によるものなのかは不明であるが、掘立柱建物跡の西から南側にかけてと、礎石建物跡の南側とでは、利用のされ方が異なっていたことが想像される。

表9 平安時代の土坑（時期不明含む）一覧①

遺構番号	地区	検出層位	平面形	規模 (m)				断面形	埋土	時期	備考 (切り合い関係)	
				上面 長軸	底面 短軸	長軸	短軸					
SK 1	C 2	I 基	円形	0.29	0.26	0.21	0.21	0.08	B 2 a 1	1層	A 不明	> SK 2
SK 2	C 2 ~ D 2	I 基	楕円形	0.85	0.61	0.83	0.57	0.15	B 1 b 1	2層	C 不明	< SK 1、底にピット
SK 4	D 2	I 基	楕円形	0.24	0.2	0.14	0.13	0.25	B 4 a 2	2層	D 不明	人為埋土？柱穴状の穴
SK 5	D 3	I 基	楕円形	0.55	0.37	0.19	0.1	0.18	B 2 a 1	3層	H 不明	> SK 6
SK 6	D 3	I 基	楕円形	0.58	0.39	0.51	0.35	0.13	B 2 a 1	1層	A 不明	< SK 5
SK 9	D 3	III上	円形	0.33	0.3	0.25	0.2	0.23	A 3 a 2	2層	C 平安?	小穴列、柱穴状の穴
SK10	D 3	III上	円形	0.29	0.25	0.26	0.22	0.09	B 2 a 1	1層	A 平安?	小穴列
SK11	D 3	III上	円形	0.30	0.29	0.13	0.12	0.16	B 2 a 1	1層	A 平安?	小穴列
SK12	D 3 ~ D 4	III上	長楕円形	0.93	0.51	0.8	0.44	0.23	B 2 c 1	2層	B 平安?	人為埋土?

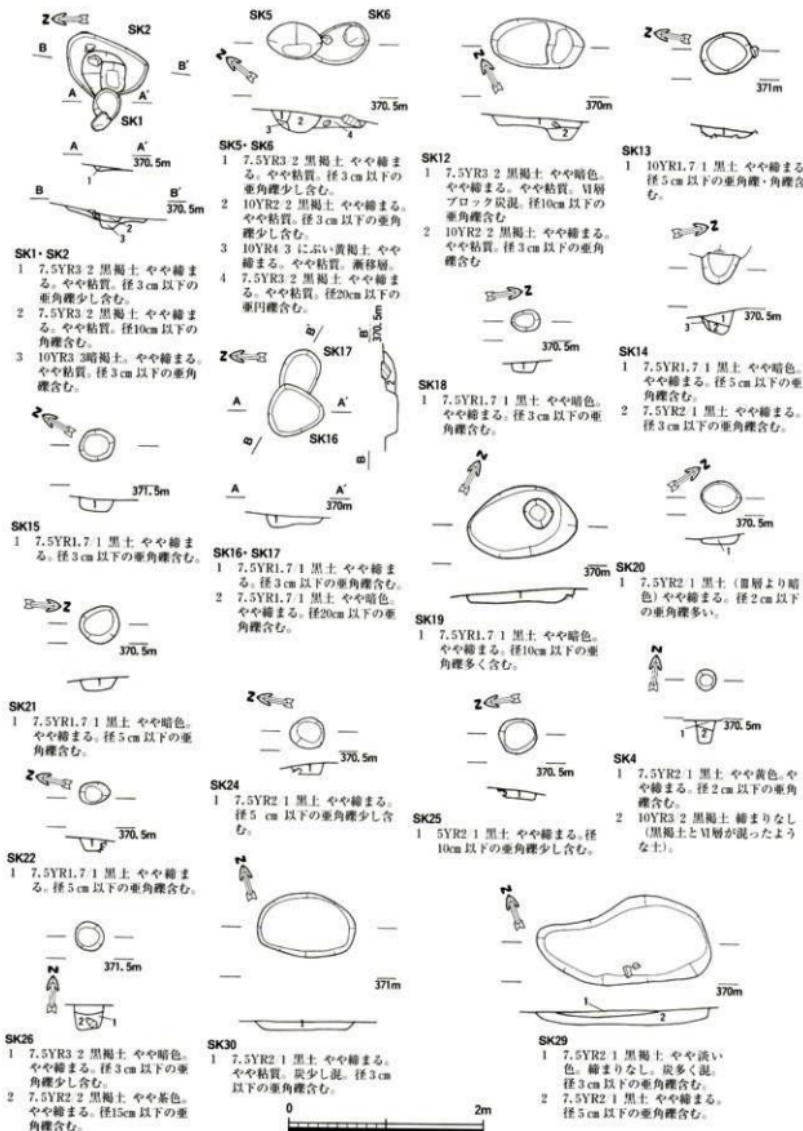


図22 平安時代の土坑（時期不明含む、S=1/50）①

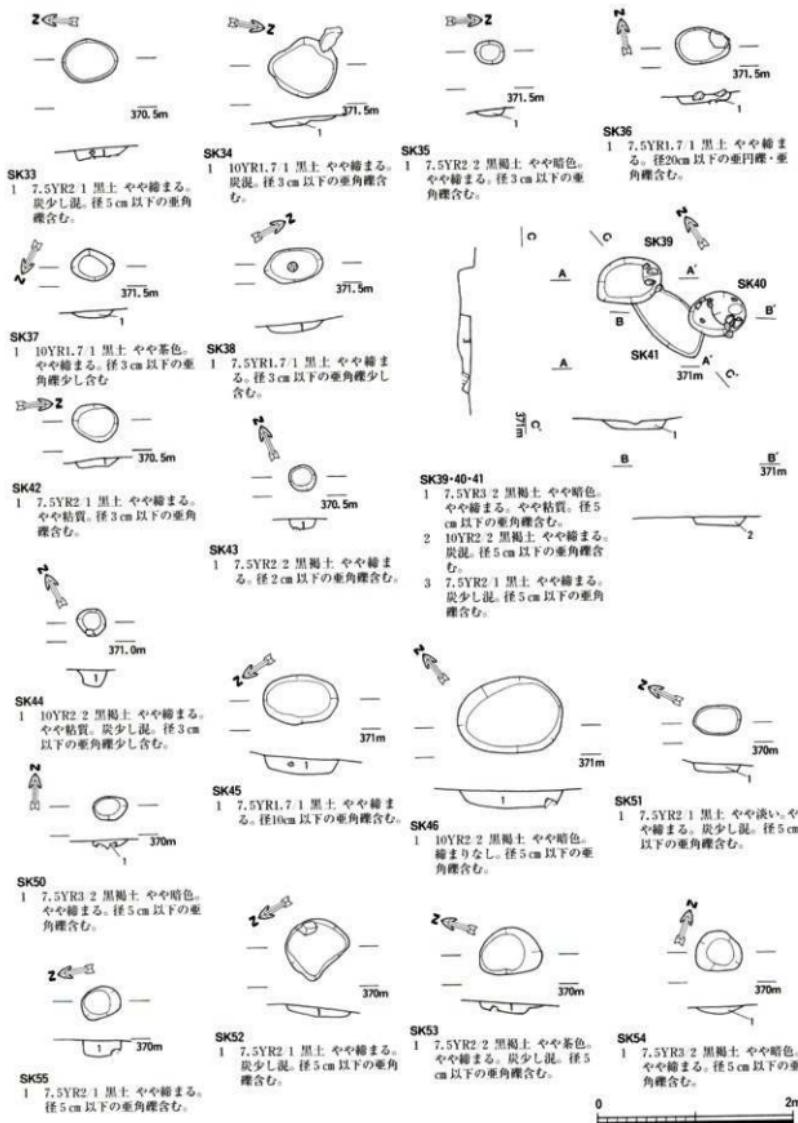


図23 平安時代の土坑（時期不明含む、S=1/50）②

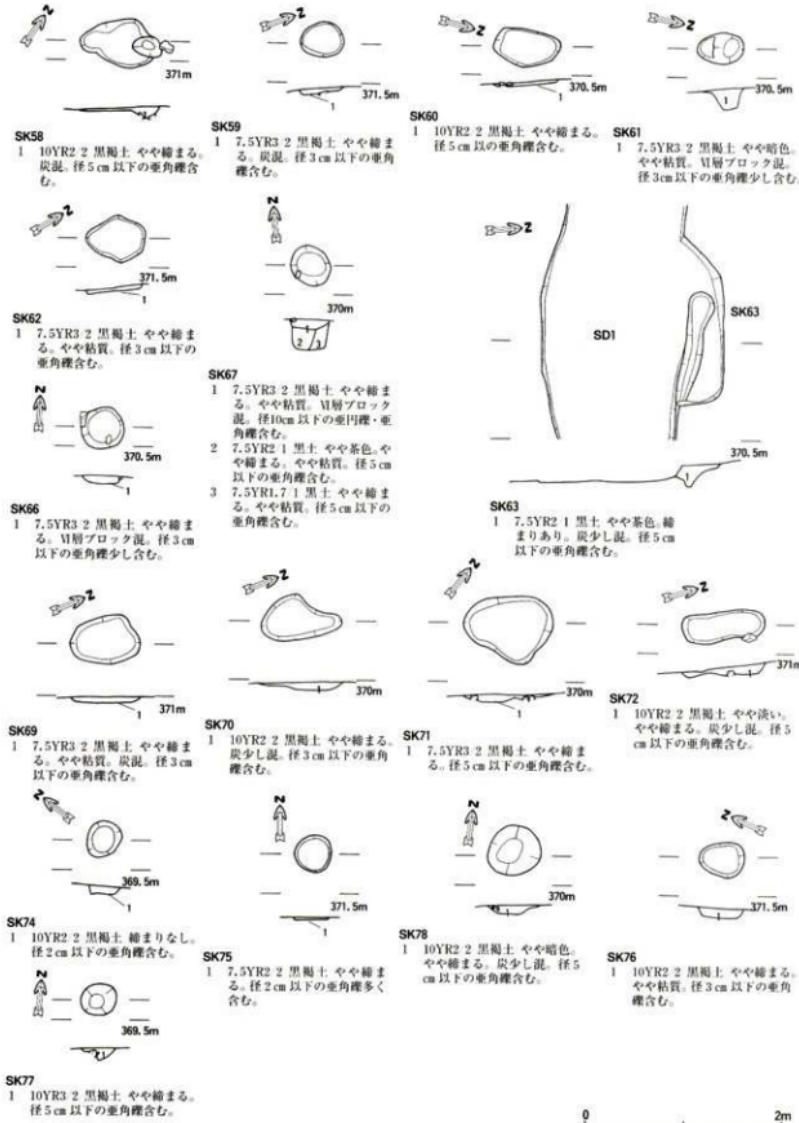


図24 平安時代の土坑（時期不明含む、S=1/50）③

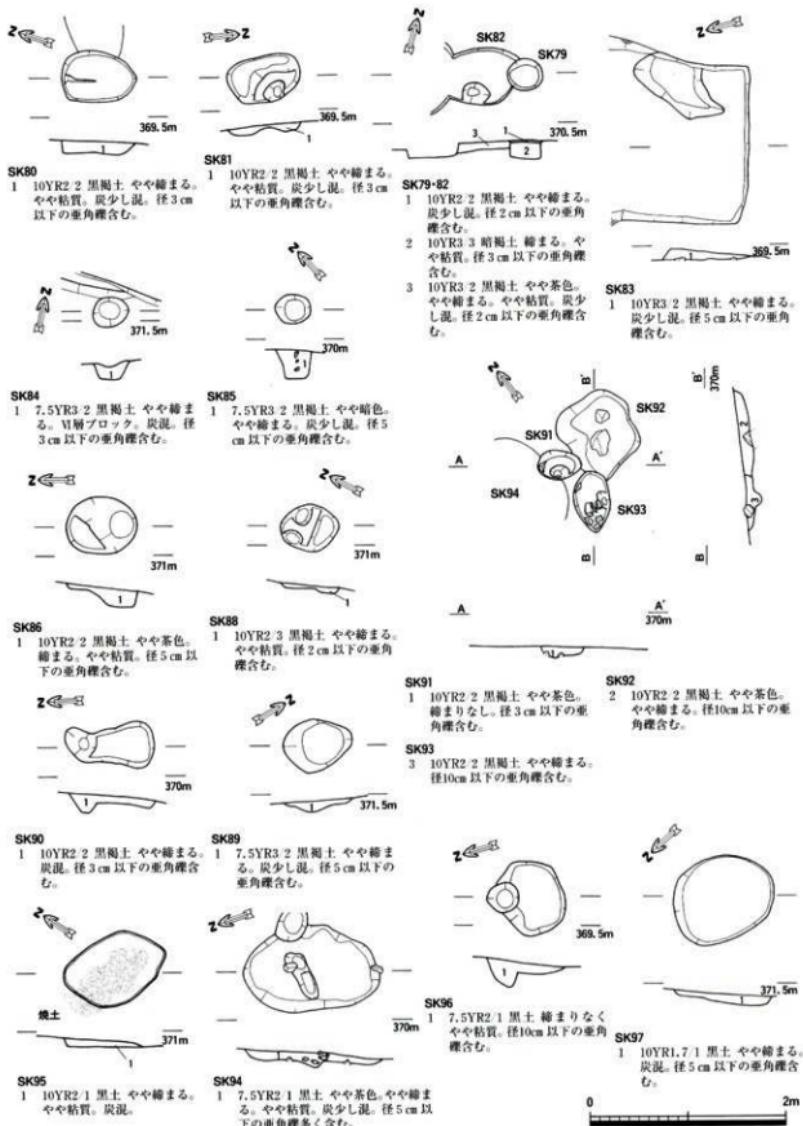


図25 平安時代の土坑 (時期不明含む、S = 1/50) (4)

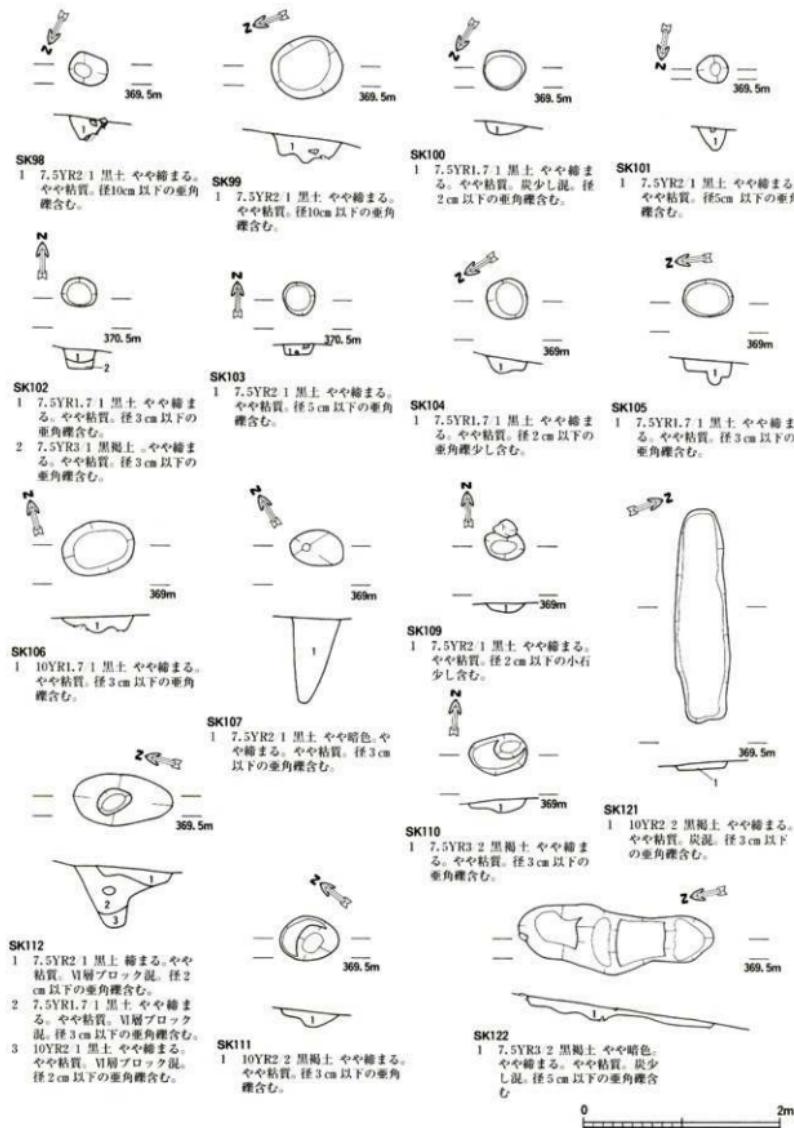


図26 平安時代の土坑 (時期不明含む、S = 1/50) ⑤

表10 平安時代の土坑(時期不明含む)一覧②

遺構番号	地区	検出層位	平面形	規模(m)				断面形	埋土	時期	備考(切り合い関係)
				上面	底面	長軸	短軸				
SK13 F2	Ⅲ上	長楕円形	0.62	0.41	0.46	0.35	0.1	B1a1	1層	A	平安?
SK14 G2	Ⅲ上	楕円形	0.38	(0.31)	0.25	(0.23)	0.24	B6a1	2層	B	平安?
SK15 G2	Ⅲ上	楕円形	0.36	0.29	0.32	0.22	0.2	B2a1	1層	A	平安?
SK16 G2~H3	Ⅲ上	不整円形	0.54	0.52	0.47	0.45	0.15	B1a1	1層	A	平安? >SK17
SK17 H2~H3	Ⅲ上	楕円形	(0.47)	0.36	(0.44)	0.28	0.14	B2a1	1層	A	平安? <SK16
SK18 H2~H3	Ⅲ上	長楕円形	0.33	0.21	0.25	0.13	0.15	B3a2	1層	A	平安?
SK19 G3	Ⅲ上	長楕円形	1.11	0.72	1.03	0.62	0.29	B2b2	1層	A	平安? 底にビット
SK20 G2	Ⅲ上	円形	0.38	0.33	0.33	0.27	0.13	B2a2	1層	A	平安?
SK21 G3	Ⅲ上	円形	0.38	0.34	0.32	0.28	0.12	B2a2	1層	A	平安?
SK22 F2	Ⅲ上	長楕円形	0.31	0.2	0.17	0.14	0.13	B2a1	1層	A	平安?
SK24 F2	Ⅲ上	円形	0.33	0.29	0.27	0.22	0.11	B2a1	1層	A	平安?
SK25 F3	Ⅲ上	楕円形	0.40	0.32	0.34	0.26	0.08	B1a2	1層	A	平安?
SK26 E3	Ⅲ上	円形	0.30	0.29	0.25	0.22	0.25	B3a2	2層	B	平安? >SK65、柱穴状の穴
SK29 E4	Ⅲ上	不整長楕円形	1.75	0.88	1.56	0.7	0.24	B1a1	2層	B	平安? 埋土炭多い
SK30 H2	Ⅲ上	長楕円形	0.99	0.64	0.89	0.45	0.09	B1c1	1層	A	不明 >SS1
SK33 H2	Ⅲ上	楕円形	0.56	0.44	0.47	0.37	0.11	B1c1	1層	A	不明 >SS1
SK34 H3	Ⅱ基	不整円形	0.66	0.59	0.6	0.47	0.11	B1c1	1層	A	不明
SK35 H3	Ⅱ基	楕円形	0.32	0.25	0.17	0.16	0.12	B2a1	1層	A	不明
SK36 H3	Ⅱ基	楕円形	0.53	0.37	0.47	0.3	0.11	B1a1	1層	A	不明
SK37 H3	Ⅱ基	楕円形	0.40	0.28	0.27	0.21	0.12	B2a1	1層	A	不明
SK38 H3	Ⅱ基	長楕円形	0.59	0.36	0.49	0.28	0.11	B2a1	1層	A	不明
SK39 H2	Ⅱ基	楕円形	0.68	0.47	0.48	0.38	0.15	B2c1	1層	A	不明 >SK41
SK40 H2~E3	Ⅱ基	楕円形	0.57	0.44	0.54	0.34	0.26	B2b1	1層	A	不明 >SK41
SK41 H2~H3	Ⅱ基	長楕円形	(0.83)	0.42	(0.08)	0.37	0.14	B2a1	1層	A	不明 <SK39~40
SK42 I3	I基	長楕円形	0.51	0.34	0.39	0.3	0.12	B2a1	1層	A	不明
SK43 H3	Ⅱ基	円形	0.28	0.27	0.22	0.18	0.13	B2a2	1層	A	不明
SK44 H3	Ⅱ基	円形	0.30	0.28	0.19	0.15	0.18	B2a2	1層	A	不明 柱穴状の穴
SK45 F4	Ⅲ上	長楕円形	0.79	0.46	0.66	0.35	0.23	B2a1	1層	A	平安?
SK46 F4	Ⅲ上	楕円形	1.08	0.77	0.97	0.66	0.26	B2a1	1層	A	平安?
SK50 H4	Ⅱ基	楕円形	0.35	0.26	0.31	0.21	0.12	B2c1	1層	A	不明
SK51 H4	Ⅱ基	長楕円形	0.48	0.28	0.42	0.24	0.08	B1a1	1層	A	不明
SK52 H4~H5	Ⅱ基	不整円形	0.64	0.58	0.58	0.55	0.1	B1a2	1層	A	不明
SK53 H4~H5	Ⅱ基	不整楕円形	0.62	0.47	0.48	0.32	0.1	B1c1	1層	A	不明
SK54 H5	Ⅱ基	不整椭円形	0.46	0.37	0.38	0.3	0.07	A1a1	1層	A	不明
SK55 H4	Ⅲ上	不整円形	0.37	0.32	0.26	0.25	0.18	B2a2	1層	A	不明
SK58 I2	Ⅱ基	不整長楕円形	0.81	0.5	0.77	0.45	0.1	B1b1	1層	A	不明
SK59 I3	Ⅱ基	楕円形	0.44	0.35	0.38	0.3	0.08	B1a1	1層	A	不明
SK60 I3	I基	長楕円形	0.62	0.4	0.56	0.34	0.04	B1a1	1層	A	不明
SK61 I3	I基	楕円形	0.46	0.31	0.18	0.2	0.24	B3a2	1層	A	不明 柱穴状の穴
SK62 I3	I基	不整楕円形	0.61	0.45	0.55	0.39	0.05	B1a1	1層	A	不明
SK63 I3	I基	不明	(1.65)	(0.45)	(1.55)	(0.4)	0.22	C6a1	1層	A	不明
SK66 E3	Ⅲ上	円形	0.44	0.4	0.39	0.35	0.06	B1a1	1層	A	不明 人為埋土?
SK67 F4~G4	Ⅲ上	円形	0.40	0.34	0.35	0.29	0.31	B3a2	3層	H	不明 人為埋土? ブレイク出土
SK69 J4	I基	不整長楕円形	0.69	0.44	0.57	0.35	0.06	B1a1	1層	A	不明
SK70 J4~J4	I基	不整長楕円形	0.84	0.48	0.74	0.35	0.06	B1a1	1層	A	不明
SK71 J5	I基	不整楕円形	0.86	0.7	0.76	0.57	0.06	B1a1	1層	A	不明
SK72 J5~J5	I基	長楕円形	0.84	0.32	0.78	0.26	0.09	B1a1	1層	A	不明
SK73 E3~F4	Ⅲ上	不整楕円形	1.61	1.1	1.52	1.01	0.18	B1a2	1層	A	平安? <SI1、上部に集石遺構
SK74 J6	I基	不整円形	0.43	0.36	0.31	0.25	0.11	B2a2	1層	A	不明
SK75 J6	I基	円形	0.44	0.37	0.31	0.3	0.02	B1a1	1層	A	不明
SK76 I6	I基	楕円形	0.46	0.36	0.38	0.31	0.11	B2a2	1層	A	不明
SK77 I6	I基	円形	0.39	0.34	0.31	0.24	0.1	A1a1	1層	A	不明

表11 平安時代の土坑（時期不明含む）一覧③

遺構番号	地区	検出層位	平面形	規模 (m)				断面形	埋土	時期	備考 (切り合い関係)
				上面	底面	長軸	短軸				
SK78	I6	I基	円形	0.56	0.51	0.25	0.11	0.16	B2a1	1層	A 不明
SK79	H6～16	I基	円形	0.36	0.33	0.32	0.21	0.19	B2a2	2層	B 不明
SK80	H6	II基	楕円形	0.77	0.52	0.67	0.48	0.12	B1a1	1層	A 不明
SK81	H6	II基	不整長楕円形	0.80	0.45	0.72	0.4	0.11	B1c1	1層	A 不明
SK82	H6	II基	不明	(0.66)	0.58	(0.65)	0.55	0.24	B2b2	1層	A 不明
SK83	I5～16	I基	不明	1.61	(0.90)	1.53	(0.87)	0.27	B6b1	1層	A 不明
SK84	I4	I基	円形	0.32	0.28	0.28	0.25	0.24	B3a2	1層	A 不明
SK85	I5	I基	円形	0.35	0.3	0.2	0.12	0.35	B4a2	1層	A 不明
SK86	I5	I基	楕円形	0.71	0.55	0.25	0.18	0.21	B2b2	1層	A 不明
SK88	I5	I基	不整楕円形	0.60	0.45	0.53	0.39	0.08	B1c1	1層	A 不明
SK89	H5～15	I基	不整楕円形	0.73	0.54	0.63	0.45	0.13	A1c1	1層	A 不明
SK90	I5	I基	不整長楕円形	0.90	0.44	0.75	0.35	0.2	B2b1	1層	A 不明
SK91	H5	II基	長楕円形	0.44	0.29	0.25	0.21	0.22	B3b1	1層	A 不明
SK92	H5	II基	不整円形	0.90	0.84	0.76	0.72	0.12	B1c1	1層	A 不明
SK93	H5	II基	長楕円形	0.65	0.35	0.53	0.31	0.12	B2c1	1層	A 不明
SK94	H5	II基	長楕円形	1.31	0.85	1.25	0.74	0.2	B1c1	1層	A 不明
SK95	H5	II基	長楕円形	1.08	0.67	1.01	0.6	0.07	B1a1	1層	A 不明
SK96	H6	II基	不整円形	0.81	0.73	0.64	0.65	0.27	B2b1	1層	A 不明
SK97	H5	II基	楕円形	1.03	0.84	0.92	0.77	0.16	B1a1	1層	A 不明
SK98	G5	II基	楕円形	0.40	0.31	0.11	0.17	0.27	B3b1	1層	A 不明
SK99	G6	II基	楕円形	0.74	0.58	0.57	0.35	0.29	B2c2	1層	A 不明
SK100	F5	II基	円形	0.42	0.39	0.35	0.24	0.15	A2a1	1層	A 不明
SK101	E5	I基	円形	0.30	0.27	0.14	0.14	0.22	C3a1	1層	A 不明
SK102	F3	III上	円形	0.32	0.28	0.24	0.24	0.18	B2a2	2層	B 平安？ 柱穴状の穴
SK103	E3	III上	円形	0.34	0.32	0.3	0.28	0.1	B2a2	1層	A 平安？
SK104	F6	III上	円形	0.44	0.41	0.35	0.36	0.16	B2a1	1層	A 平安？
SK105	F6	III上	楕円形	0.50	0.38	0.41	0.33	0.24	B2b2	1層	A 平安？
SK106	F6	III上	楕円形	0.74	0.54	0.58	0.39	0.15	B2c1	1層	A 平安？
SK107	F6	III上	楕円形	0.52	0.37	0.08	0.08	0.8	C5a1	1層	A 平安？
SK109	E5	I基	楕円形	0.39	0.28	0.35	0.24	0.11	B2a1	1層	A 不明
SK110	D4～D5	I基	長楕円形	0.58	0.36	0.52	0.31	0.24	B2b1	1層	A 不明
SK111	C4～D4	I基	楕円形	0.61	0.42	0.15	0.14	0.16	C2c1	1層	A 不明
SK112	A2	I基	長楕円形	1.00	0.46	0.21	0.08	0.62	C4a3	3層	E 不明 入為埋土？
SK121	H6	I基	長楕円形	2.14	0.52	2.08	0.45	0.1	B1a1	1層	A 不明 SD5を変更
SK122	H6	II基	不整長楕円形	1.93	0.6	1.87	0.52	0.18	B2c1	1層	A 不明 SD6を変更

表12 平安時代の溝状遺構一覧

遺構番号	地区	検出層位	平面形	上面規模 (m)			切り合い関係	埋土	時期	備考
				長軸	短軸	深さ				
SD 2	J5～J6	I基	南北方向・直線的	2.48	0.44	0.1	なし	1層	A 不明	土坑か？
SD 3	J6	I基	北西～南東方向・直線的	(2.26)	(0.54)	0.18	なし	1層	A 不明	調査区外に延びる
SD 4	J6	I基	東西方向・直線的	(1.34)	0.35	0.29	なし	1層	A 不明	調査区外に延びる

(7) 溝状遺構 (表12・図27)

幅が狭く細長いものを溝状遺構とし、調査区の南東部で3基検出した。それぞれ方向性が異なっており、遺物も出土していないことから、時期や性格については不明であるが、埋土中にVI層ブロックを含むSD 2とSD 3は、耕作に関わるものである可能性が考えられる。

SD 2は、南北方向の溝状遺構であるが、1994年の試掘調査坑によって一部削平されている。SD 3は、北西から南東方向に延びる溝状遺構で、調査区外に続いている。北西の末端部は非常に浅いが、南東へは幅を広げ深くなっている。SD 4は、東西方向の溝状遺構で、調査区外に延びている。西の末端部分が南西へ曲がったようになっているが、この部分は別の土坑であった可能性がある。

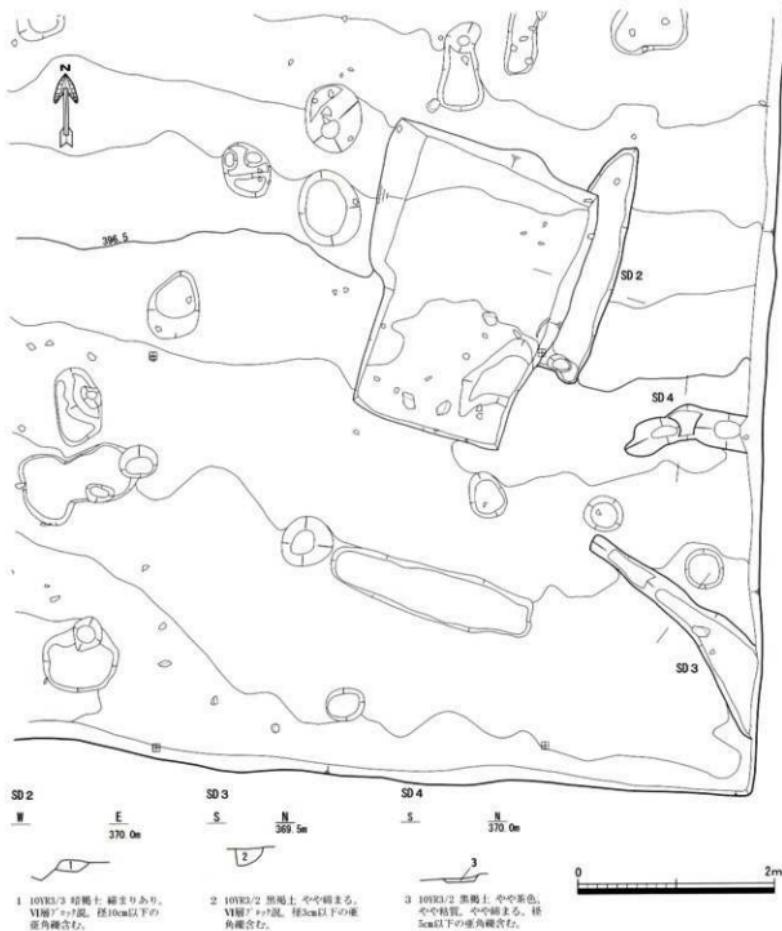


図27 平安時代の溝状遺構 (S=1/50)

## (8) 平安時代の遺物 (図28・表13・14)

包含層（基本層序のⅡ層）から出土した平安時代の遺物には、灰釉陶器・土師器・土製品がある。出土点数は、第3章第2節の表3に示した。このうちの土師器は、鍋類の体部片と思われる小片が2点出土しているだけで、図示していない。

平安時代の遺物は、大半が包含層であるⅡ層から出土しており、その分布は調査区の中央から南部にかけてである（図11）。土器片の接合関係は少なく、接合個体の中で最も出土地点が離れていたものでも直線距離で約9mであった。

**灰釉陶器（4～15）** 出土した灰釉陶器の時期は、概ね折戸53号窯式の中で理解できるが、一部黒鉢90号窯式に含まれるような古手のものと、東山72号窯式に含まれるような新しいものが認められる。4は、椀の底部片であるが、三日月状高台を貼り付け、調整も丁寧であることから、黒鉢90号窯式に相当すると思われる。5は椀の口縁部片であるが、口縁部がやや外反しており、折戸53号窯式の中でも古い段階のものと思われる。6は浅い椀で、高台も短く口縁部から体部にかけて直線的となっていることから、折戸53号窯式の新しい段階のものと思われる。口縁部から体部の内外面には、漆と思われる黒い付着物が点々と残っている。7は、胎土・色調とも6とよく似ており、同一個体の可能性がある。8は、椀の底部と思われるが、内面には漆と思われる黒い付着物が残る。高台は短く折戸53号窯式の新しい段階のものと思われる。9・10は、胎土・色調とも6とよく似ており、同一個体と思われる椀の口縁部片である。口縁部から体部にかけて内彎している。折戸53号窯式と思われる。11は、三日月状の短い高台を持つ皿で、折戸53号窯式の古い段階のものと思われる。12は皿の口縁部片で、やや口縁部が外反することから折戸53号窯式の新しい段階のものと思われる。13と14は皿の底部片で、胎土・色調がよく似ていることから同一個体と思われる。高台は短く開いており、折戸53号窯式の新しい段階か東山72号窯式の古い段階のものと思われる。15は、段皿の口縁部片である。

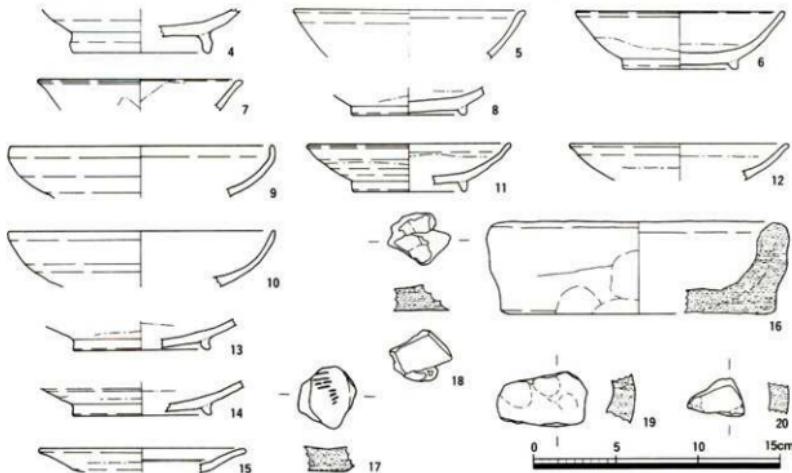


図28 包含層出土灰釉陶器・土製品

**土製品(16~20)** 土師質の焼き物で、形状から土器や他の製品の可能性も考えられたが、断定する根拠に欠けるため、性格不明の土製品として扱った。これらの時期は、遺物自体からは判断できないが、Ⅱ層中から出土した遺物の主体となるのが灰釉陶器であることから、10世紀頃のものである可能性が高いと思われる。16は、浅い鉢状の形態をしたものであるが、内外面の調整は粗い。口縁部から底部内面にかけては、非常に高い温度で被熱して還元され、器壁は硬く灰色に変色し、口縁部の一部では発泡したように器面が荒れている。これに対して底部外面は、生焼けの状態で脆い。鋳型(荒型)あるいは取瓶の可能性も考えられたが、金属の付着や真土と思われるようなものが認められない。17~20は、色調や胎土が非常によく似ており、同一個体と思われる。胎土には細砂が多く含み、外面は黒色で、断面から内面は褐色もしくは灰褐色である。18以外の3点は内面の調整が不明で、砂粒が浮き出ていることから、器面は摩滅していると思われる。17・18は、外面が平坦で土器の底部と似ている。19・20は渋曲しており、土器の体部のようでもある。

表13 灰釉陶器観察表

No.	地区・層位	器種	調整	口径	器高	底径	残存率	胎土	焼成	色調	備考	挿図	整理No.	
1 SS2	I 植	ロクロ施で、回転ヘラ削り	-	-	7.4	-	-	1mm以下の長石粒含む	良	灰白	漆全面に付着	14	6 96	
2 G2	II 盆	ロクロ施で	12.6	6.6	2.1	4.3	-	砂粒あまり含まない	良	灰白	漆全面に付着	14	6 16~19, 98	
3 SP3	I 植	ロクロ施で、回転ヘラ削り	-	-	8.6	-	-	1mm以下の砂粒わずかに含む	良	にぶい黄橙	内面非常に平滑	16	6 24	
4 D6	II 植	ロクロ施で、回転ヘラ削り	-	-	8.4	-	-	1mm以下の長石粒含む	良	にぶい黄橙	内面平滑	28	6 86	
5 D5,D6, F6	II 植	ロクロ施で	14.2	-	-	1.8	-	1mm以下の長石粒やや多く含む	良	褐灰	灰黃	漆が内外面に斑点状に付着	28	6 72, 82, 94
6 D4,D5	II 植	ロクロ施で	12.8	3.55	6.8	3.1	-	1mm以下の長石粒わずかに含む	良	浅黄橙	-	28	6 7, 8	
7 D5	II 植	ロクロ施で	12.4	-	-	1.5	-	1mm以下の砂粒わずかに含む	良	にぶい黄橙	-	28	6 88	
8 C5	II 植	ロクロ施で、回転ヘラ削り	-	-	7.0	-	-	2mm以下の砂粒・長石粒わずかに含む	良	にぶい黄橙	内面に漆が付着する	28	6 92	
9 D5	II 植	ロクロ施で	16.0	-	-	1	-	1mm以下の長石粒やや多く含む	良	にぶい黄橙	灰白	5と同一個体	28	6 85
10 D5,F5	II 植	ロクロ施で	16.2	-	-	1	-	1mm以下の長石粒やや多く含む	良	灰白	-	6と同一個体	28	6 66, 77
11 C4	II 盆	ロクロ施で	12.6	2.85	6.8	3.1	-	1mm以下の長石粒やや多く含む	良	灰白	にぶい黄橙	内面平滑	28	6 4
12 G6	II 盆	ロクロ施で	13.1	-	-	1.8	-	1mm以下の長石粒やや多く含む	良	灰白	-	28	6 71	
13 D6	II 盆	ロクロ施で	-	-	8.2	-	-	1mm以下の長石粒わずかに含む	良	にぶい黄橙	内面平滑、14と同一個体か	28	6 95	
14 D5,D6	II 盆	ロクロ施で、回転ヘラ削り	-	-	8.3	-	-	1ミリ以下の長石粒わずかに含む	良	にぶい黄橙	内面平滑、13と同一個体か	28	6 75, 81	
15 H6	II 盆	ロクロ施で	12.4	-	-	-	-	1ミリ以下の長石粒わずかに含む	良	灰白	灰オーリープ	28	6 69	

表14 土製品観察表

No.	地区・層位	種類	調整	口径	器高	底径	残存率	胎土	焼成	色調	備考	挿図	整理No.
16 D 4	II 鉢	指撫で	16.4	5.6	16.7	2	5mm以下の砂粒多く含む、繊維痕あり	不 良	にぶい黄橙／灰	内面は2次的 な被熱	28	6 6	
17 F 4	II 明	不撫で、底部に硝毛目状の痕跡	-	-	-	-	1mm以下の砂粒多く含む	良	黑／褐灰／褐灰	胎土粗い	28	6 107	
18 F 5	II 不明	不撫で、指押さ	-	-	-	-	1mm以下の砂粒多く含む	良	黑褐／褐灰／灰褐	胎土粗い	28	6 1	
19 F 4	II 不明	不撫で、指押さ	-	-	-	-	1mm以下の砂粒多く含む	良	黑／灰褐／灰褐	胎土粗い	28	6 106	
20 F 4	II 不明	不撫で	-	-	-	-	1mm以下の砂粒多く含む	良	黑／灰褐／灰褐	胎土粗い	28	6 99	

## 第5節 繩文時代

縄文時代と思われる遺構には、10基の土坑がある（表15）。これらは、縄文時代の遺物が出土したものや、Ⅲ層よりも下の面で検出したものである。また、Ⅲ層よりも下の面で検出した土坑のうち、SK113～SK116は、トレンチ調査（図29）の際に検出したものである。

### (1) 土坑（図30・32）

SK47 調査区中央の東部よりで検出した。円形の深い土坑であるが、中央部が凹む。この部分は、土層断面図では、別の掘り込みのように認められるが、調査時には同一のものとして掘削している。同一個体と思われる土器片が埋土中から出土しているが、多くは土坑の東半部分に集中しており（図30）、

表15 縄文時代の土坑一覧

遺構番号	地区	検出層位	平面形	規模(m)				断面形	埋土	時期	備考（切り合い関係）				
				上面		底面									
				長軸	短軸	長軸	短軸								
SK47	H4	II基	円形	1.21	1.14	1.11	1.06	0.25	B1b2	4層	F	縄文中期 2基の土坑の切り合い? 土器・フレイク出土			
SK48	H4	II基	椭円形	0.55	0.37	0.49	0.33	0.09	B1a1	1層	A	縄文? 土器出土			
SK49	H4	II基	椭円形	0.62	0.43	0.54	0.38	0.1	B1a2	1層	A	縄文? 土器出土			
SK68	I4	I基	不整円形	1.24	1.3	0.54	0.21	0.28	B1b1	6層	E	人為埋土? 石錘・フレイク出土			
SK87	I5	I基	椭円形	0.77	0.64	0.57	0.4	0.35	B2a1	1層	A	縄文? 土器出土			
SK108	E5	I基	長楕円形	0.63	0.42	0.52	0.33	0.28	B2a2	2層	B	縄文? 石皿出土			
SK113	F6	III基	椭円形	1.05	0.85	0.45	0.42	1.05	B4b2	7層	B	縄文? < SK107			
SK114	E6	VI上	円形	0.24	0.21	0.19	0.17	0.19	B3b2	1層	A	縄文? 人為埋土?			
SK115	D4	VI上	円形	0.25	0.25	0.16	0.13	0.09	A2a1	1層	A	縄文?			
SK116	D4	VI上	円形	0.23	0.23	0.15	0.14	0.08	B2a1	1層	A	縄文? 人為埋土?			

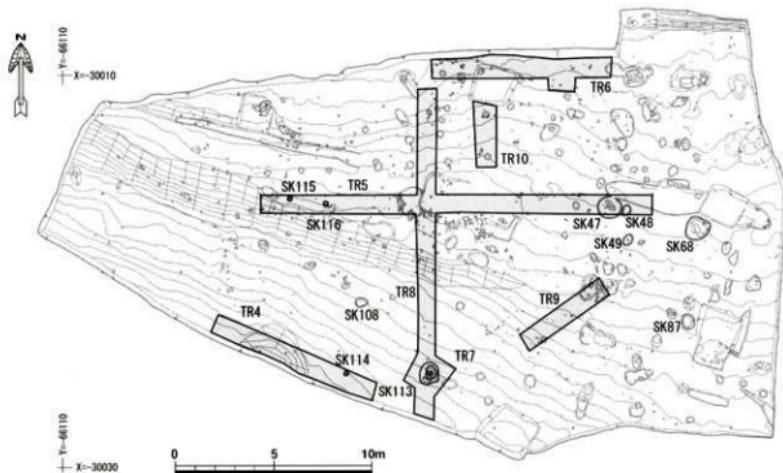


図29 トレンチ設定位置図 (S=1/250)

意図的に土器片を混入したとも考えられる。このため、墓坑の可能性があると思われる。この場合、中央の掘り込みを全く別の遺構との切り合いと考えるか、埋葬後の掘り返しと考えるかが課題となるが不明である。なお、SK48とSK49から出土した縄文土器は、SK47出土のものと非常によく似たもので、同一個体の可能性が高いと思われる。

出土した土器（21～34）は、口縁部から胴部の破片であるが、胎土・色調・地文となる縄文が非常によく似ており、すべて同一個体と思われる。また、SK47確認時点で包含層出土として取り上げた同様の土器片があるが、これらも出土位置はSK47のプラン内に含まれており、検出面を下げすぎたことにより包含層出土扱いにしてしまったものと判断した。

土器は口縁部が内彎するキャリバー形の深鉢で、頸部は屈曲して内面に明瞭な段を持つ。ほぼ全面にやや細い筋の整ったRL縄文を施す。21～24は口縁部片で、端部を内側に折り返してやや肥厚させ、縄文を施している。口縁部外面は、口縁部に沿って円形の刺突文と断面三角形の隆帯を巡らす。その下にはヘラによる刻みを持つ隆帯を上弦の連弧状に貼り付け、その下に沿うように円形の刺突文を施している。25・26は、口縁部片であるが、端部を欠く。頸部には爪形文列を1条施し、胴部と口縁部を画する。27・28は、頸部内面の屈曲部であることから、胴部でも上半部の破片で文様はない。29～34は胴部片で、地文の縄文が施されるだけである。34は、屈曲部に近い部位の破片と思われる。中期の船元I式A類（問壁1971）に類似し、船元・里木式土器様式の第2様式b期（泉1988）に併行する時期のものと思われる。

石器は、微細な剥離痕を有する剥片が1点出土した（35）。微細な剥離痕は、背面の右辺に認められる。

遺構の時期は、出土した土器から中期前葉と思われる。

**SK48** 調査区の中央、SK47の東側で検出した、楕円形の深い土坑である。縄文土器胴部片が1点出土している（36）。接合はしなかったものの、SK47出土縄文土器と胎土・色調・地文がよく似ていることから、同一個体の可能性が高いと思われる。やや細い筋の整ったRL縄文を施すだけで、文様はない。出土した土器は、中期前葉のものであるが、混入した可能性も考えられるため、遺構の時期は中期前葉以降とする。

**SK49** 調査区の中央、SK47の南東側で検出した、楕円形の深い土坑である。縄文土器胴部片が1点出土した（37）。接合はしなかったが、SK47出土縄文土器と胎土・色調・地文がよく似ていることから、同一個体の可能性が高いと思われる。出土した土器は、中期前葉のものであるが、混入した可能性も考えられるため、遺構の時期は中期前葉以降とする。

**SK68** 調査区東部で検出した、不整円形で底面が凹む土坑である。埋土中にVI層ブロックが混入しており、人為的な埋め戻しが行われた可能性があるため、墓坑の可能性も考えられる。埋土中から石器が2点出土している。

38は石錘であるが、楕円形の円礫の両端を打ち欠いた後、一方のみ切目を入れ紐掛け部としている。

39は、調整剥離を施す剥片で、背面の右辺に調整剥離と微細な剥離痕が認められる。

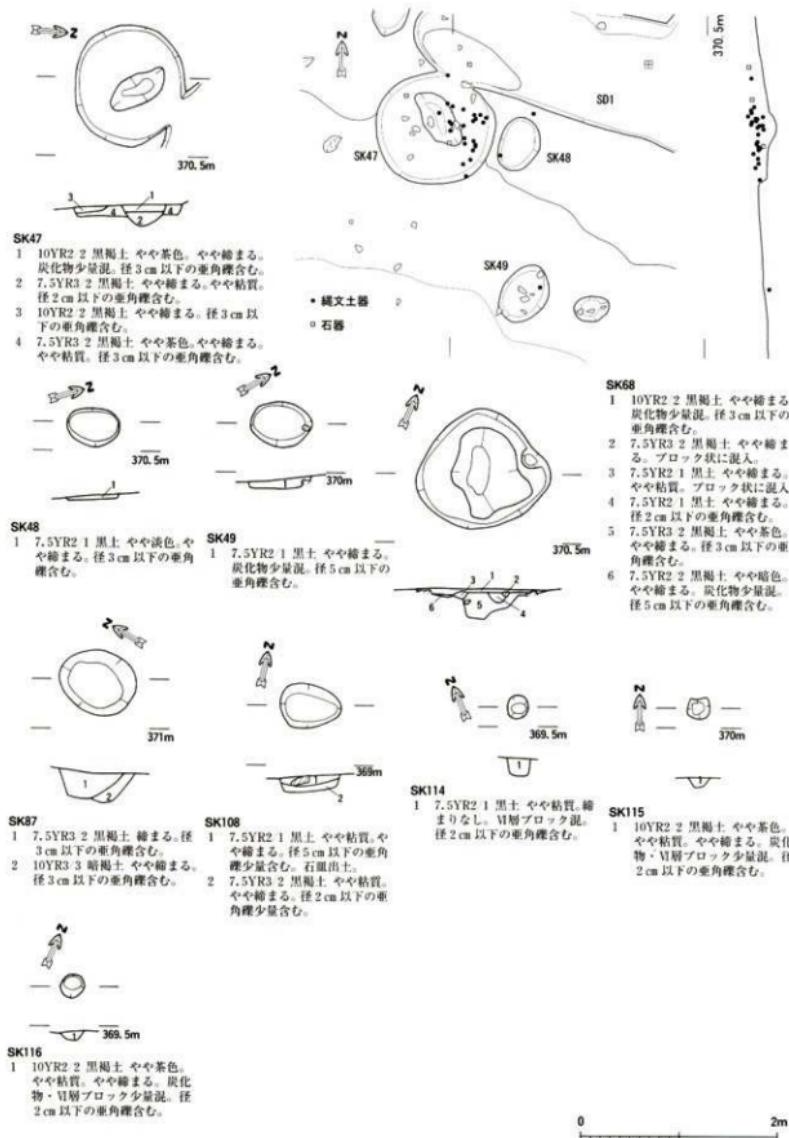


図30 純文時代の土坑 (S=1/50)

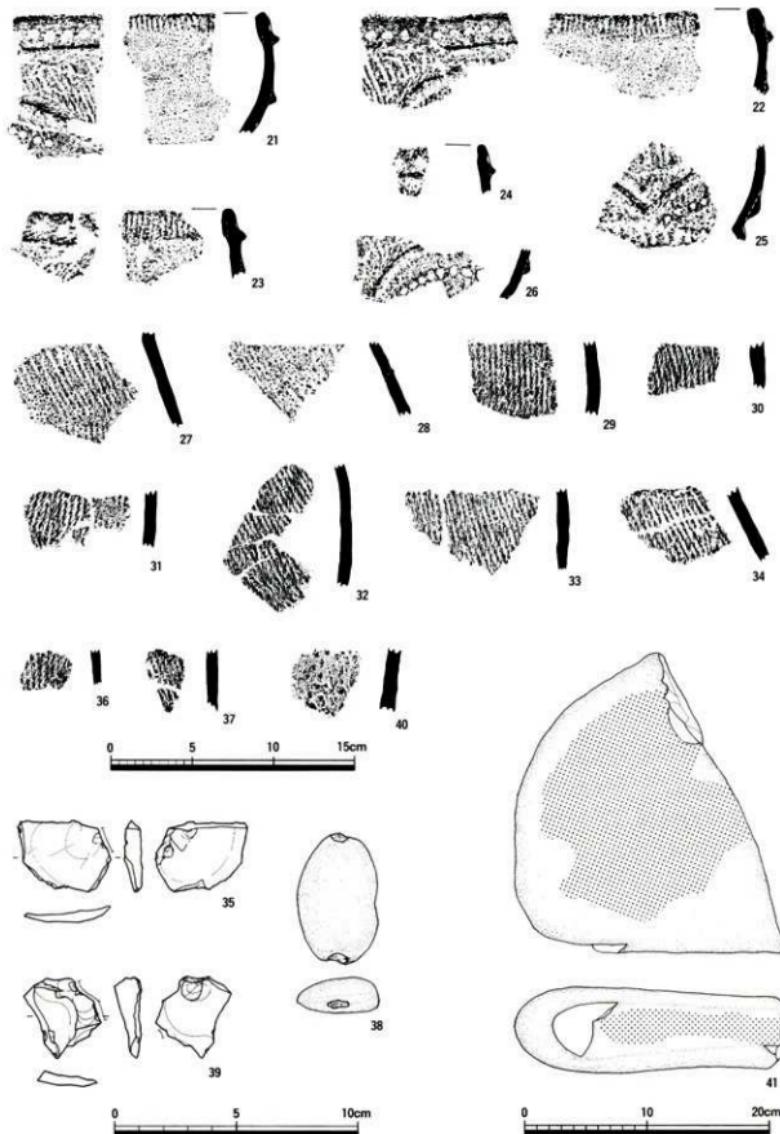


図31 縄文時代の土坑出土遺物

土器が出土していないため、遺構の細別時期は不明である。

**SK87** 調査区南東部で検出した、楕円形のやや深い土坑である。土層断面からは、2基の土坑が重複しているように思われるが、平面的には1つの土坑として掘削した。埋土中から縄文土器が1点出土した(40)。深鉢の胴部片で、楕円押型文を施す。早期の高山寺式と思われる。

遺構の時期は、出土した土器から早期の可能性が考えられるが、混入した可能性も考えられるため、早期以降とする。

**SK108** 調査区南部で検出した、楕円形で浅い土坑である。埋土上部から石皿(41)が出土したこと

表16 縄文土器観察表

No.	地区・ 遺構	器種	部位	調整	文様	胎上	焼成	色調	備考	博 國 版 No.
21	SK47	1 深鉢	口縁	撫で、地文 RL 繩文 (3条2.5節 1cm)	刺突(径0.4cm, 0.75cm) 隆帝(幅1.05cm)	密、3mm以下の砂 粒多く含む	普通	橙	口縁部内面肥厚	31 8 51, 52
22	SK47	1 深鉢	口縁	撫で、地文 RL 繩文 (3条2.5節 1cm)	刺突(径0.75cm) 隆帝(幅1.1cm)	密、4mm以下の砂 粒多く含む	普通	にぶい褐 橙 橙	推定口徑45.8cm	31 8 36, 38
23	SK47	1 深鉢	口縁	撫で、地文 RL 繩文 (3条2.5節 1cm)	刺突(径0.75cm) 隆帝(幅1.0cm)	密、3mm以下の砂 粒多く含む	普通	橙	口縁部内面肥厚	31 8 41
24	SK47	1 深鉢	口縁	摩滅不明	刺突(径0.75cm) 隆帝(1.0cm)	やや密、2mm以下の 砂粒多く含む	普通	明褐 明褐 黒褐		31 8 45
25	SK47	1 深鉢	口縁	撫で、地文 RL 繩文 (3条2.5節 1cm)	刺突(径0.4cm) 隆帝(幅1.1cm)	密、3mm以下の砂 粒多く含む	普通	明赤褐 橙 橙	端部欠損、外面 に炭化物付着	31 8 44
26	H4	III 深鉢	口縁	撫で、地文 RL 繩文 (3条2.5節 1cm)	刺突(径0.45cm) 隆帝(幅0.9cm)	密、3mm以下の砂 粒多く含む	普通	橙	端部欠損	31 8 11, 26
27	SK47	1 深鉢	胴部	撫で、地文 RL 繩文 (3条2.5節 1cm)	なし	密、5mm以下の砂 粒多く含む	普通	明褐 橙 明赤褐	屈曲部	31 8 50
28	SK47	1 深鉢	胴部	撫で、地文 RL 繩文 (3条2.5節 1cm)	なし	密、4mm以下の砂 粒多く含む	普通	橙	屈曲部	31 8 43
29	SK47	1 深鉢	胴部	撫で、地文 RL 繩文 (3条2.5節 1cm)	なし	密、3mm以下の砂 粒多く含む	普通	にぶい褐		31 8 30
30	SK47	1 深鉢	胴部	撫で、地文 RL 繩文 (3条2.5節 1cm)	なし	密、2mm以下の砂 粒多く含む	普通	にぶい赤褐 明赤 褐	外面に炭化物付 着	31 8 30
31	SK47 H4	III 深鉢	胴部	撫で、地文 RL 繩文 (3条2.5節 1cm)	なし	密、2mm以下の砂 粒多く含む	普通	にぶい褐	外面に炭化物付 着	31 8 12, 42
32	SK47	1 深鉢	胴部	撫で、地文 RL 繩文 (3条2.5節 1cm)	なし	密、4mm以下の砂 粒多く含む	普通	灰黄褐 橙 暗灰	外面に炭化物付 着	31 8 40
33	SK47	1 深鉢	胴部	撫で、地文 RL 繩文 (3条2.5節 1cm)	なし	密、3mm以下の砂 粒多く含む	普通	にぶい褐 にぶい 褐		31 8 35, 48
34	H4	III 深鉢	胴部	撫で、地文 RL 繩文 (3条1.5節 1cm)	なし	密、2mm以下の砂 粒多く含む	普通	橙		31 8 25
36	SK48	1 深鉢	胴部	撫で、地文 RL 繩文 (3条2.5節 1cm)	なし	密、2mm以下の砂 粒多く含む	普通	にぶい赤褐 にぶい 褐	外面に炭化物付 着	31 8 32
37	SK49	2 深鉢	胴部	撫で、地文 RL 繩文 (3条2.5節 1cm)	なし	密、3mm以下の砂 粒多く含む	普通	にぶい褐 橙 明 赤褐		31 8 31
40	SK87	1 深鉢	胴部	撫で	楕円押型文	やや粗、3mm以下の 砂粒多く含む	普通	橙 にぶい黄褐 明赤褐		31 8 54

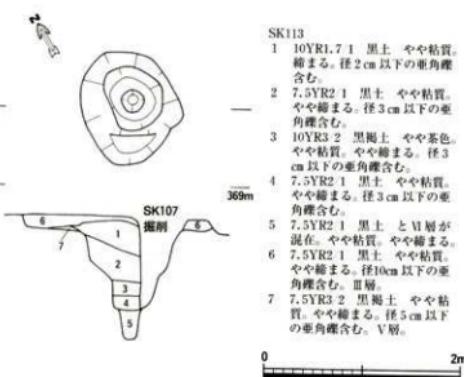


図32 SK113 (S=1/50)

- SK113  
 1 10YR1.7 1 黒土 やや粘質。  
縮まる。径2cm以下の亜角離  
合む。  
 2 7.5YR2.1 黒土 やや粘質。  
やや縮まる。径3cm以下の亜  
角離合む。  
 3 10YR3.2 黒褐色 やや粘質。  
やや縮まる。径3cm以下の亜  
角離合む。  
 4 7.5YR2.1 黒土 やや粘質。  
やや縮まる。径3cm以下の亜  
角離合む。  
 5 7.5YR2.1 黒土 とⅠ層が  
混在。やや粘質。やや縮まる。  
 6 7.5YR2.1 黒土 やや粘質。  
やや縮まる。径10cm以下の亜  
角離合む。Ⅲ層。  
 7 7.5YR2.2 黒褐色 やや粘  
質。やや縮まる。径5cm以下  
の亜角離合む。V層。

から、墓坑の可能性が考えられる。石皿は、扁平な円碟を利用したもので、表面と側面に磨面を持つが、欠損している。土器が出土していないため、遺構の細別時期は不明である。

**SK113（図32）** 調査区南部で検出した、楕円形の土坑であるが、壁面に段があり、底面はさらにピット状に深くなることから、落とし穴の可能性があると思われる。SK107を掘削した際に、深く掘りすぎたことによって確認できた遺構である。Ⅲ層上面では確認できず、トレンチ7を設定して掘削したところ、V層上面（Ⅲ層基底面）で確認できたため、縄文時代のものと判断した。土器は出土していないため、細別時期は不明である。

**SK114～SK116** 調査区中央西寄りに位置し、トレンチ4掘削により検出した。いずれも円形の小土坑で、遺物は出土していない。VI層上面で検出したことから、縄文時代の遺構の可能性があると思われるが、Ⅲ層上面での遺構確認時に見落としていた可能性は否定できない。

## (2) 包含層出土遺物（図33）

包含層（Ⅱ層～Ⅳ層）から出土した縄文時代の遺物には、縄文土器と石器があるが、縄文土器はSK47に伴う可能性があるものの他は、無文の小片が出土しただけであり、図化していない。

**異形石器（42）** チャート製のものが1点出土している。石礫に類似した形態の石器であるが、いわゆる異形部分磨製石器（トロトロ石器）に特徴的な要素を持つものの、小型で研磨が認められないため、異形石器とした。両側縁が基部で少し括れ、脚部がつまみ状となり、先端部は欠損しているが、丸みを持つと思われる。異形部分磨製石器との共通性から早期の石器と思われる。

**石匙（43）** チャート製のものが1点出土している。素材剥片の打点付近に、2方向から抉りを入れてつまみ部を作り出し、片面調整により縁辺部に刃部を形成している。腹面には微細な剥離痕が認められる。

**打製石斧（44～47）** 4点出土しており、石材は泥岩2点、片岩1点、安山岩1点である。44～46は、両側縁がほぼ平行する短冊形で、47は基部を欠損しているが、刃部で最大幅となる撥形と思われる。45の刃部には、両面に摩耗痕と刃部に対して斜行する線状痕が確認でき、刃こぼれも認められる。46の両面には、装着痕と思われる摩耗痕が認められる。47の刃部には、両面に顕著な摩耗痕があり、裏面には刃部に対して直交する線状痕が確認できる。

**調整剥離を施す剥片（48）** 包含層からは1点出土した。自然面を残す素材剥片の側縁に、両面調整を施している。石材からは、打製石斧の破損品の可能性も考えられる。

**微細な剥離痕を有する剥片（49～52）** 包含層からは2点の出土であるが、50が出土したSD1は中世以降の、52が出土したSK67は平安時代の遺構であるため、ここに含めた。剥片の縁辺の一部に微細な剥離痕が認められる。

**打欠石錘（53・54）** 包含層からは2点出土している。楕円形の円碟の両端を打ち欠いて紐掛け部としている。

**凹石（55）** 1点出土した。扁平な亜角碟を用い、表面のほぼ中央に敲打による凹みが形成されている。裏面や側面には摩耗痕、敲打痕などは確認できなかった。

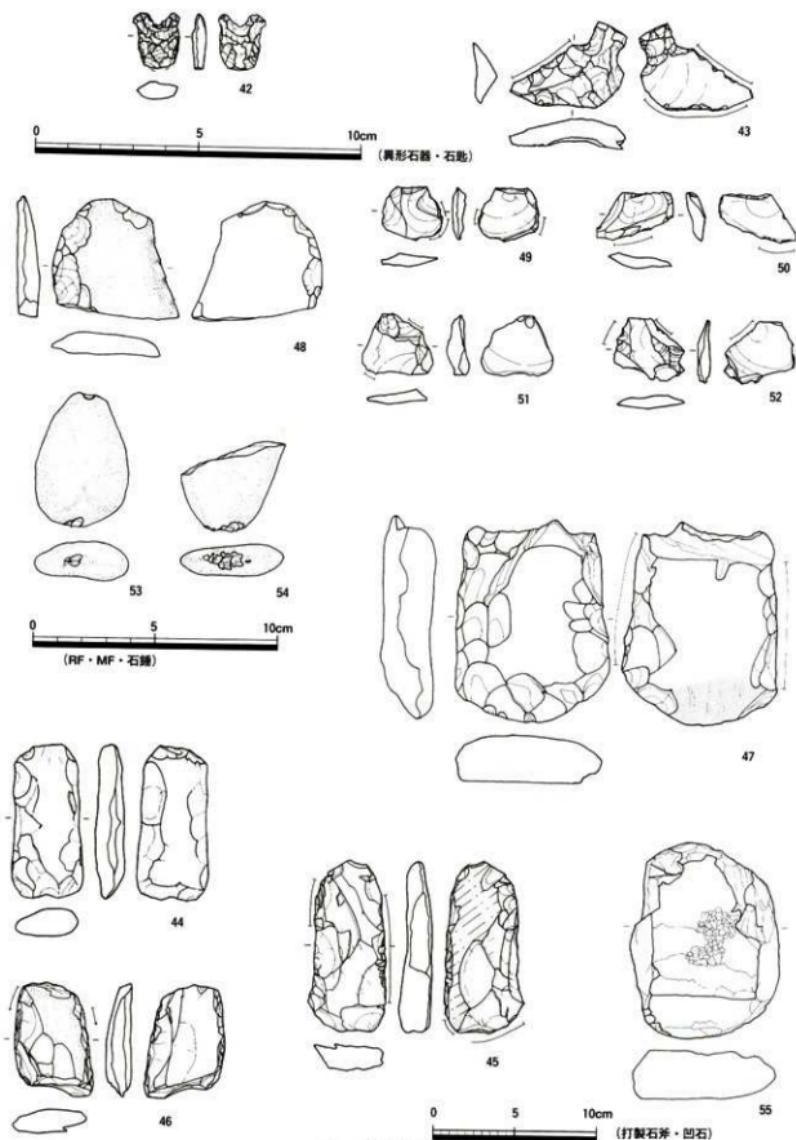


図33 包含層出土石器

表17 出土石器観察表

## 異形石器

No	地区	層位	整理No	石材	長さ	幅	厚さ	質量	備考	挿図	図版
42	H 5	III	2	チャート	(1.7)	1.4	0.45	(1.1)	研磨痕なし、先端部欠損	33	8

## 石匙

No	地区	層位	整理No	石材	長さ	幅	厚さ	質量	剥離痕のある縁辺の状況			備考	挿図	図版	
									位置	剥離	平面形	角度			
43	G 5	II	62	チャート	3.6	4.2	0.9	12.4	末端辺 左辺	両面 片面	平形 平形	69 63	微細な剥離 痕あり	33	8

## 打製石斧

No	地区	層位	整理No	石材	長さ	幅	厚さ	質量	刃部			使用痕	折損部位	挿図	図版
									形態	幅	角度				
44	G 4	III	108	片岩	9.4	4.5	1.8	90.5	円刃	4.1	52	不明	なし	33	8
45	Tr2	I	X 3	泥岩	10.6	4.9	1.8	113.1	直刃	4.45	59	刃部摩耗痕、斜行する 縦状痕、刃こぼれ	なし	33	8
46	G 6	II	61	泥岩	(7.2)	4.8	1.5	(67.3)	不明	-	-	基部に摩耗痕	刃部	33	8
47	F 4	III	102	安山岩	(12.5)	9.6	3	(520.3)	円刃	9.18	58	刃部摩耗痕、直交する 縦状痕	基部	33	9

## 調整剥離を施す剥片

No	地区・ 遺構	層位	整理 No	石材	長さ	幅	厚さ	質量	加工部			備考	挿図	図版	
									位置	調整	平面形	刃部角			
39	SK68	I	47	チャート	3.2	2.6	0.5	5.9	右辺	片面	凹形	57	微細な剥離痕あり	31	8
48	H 6	II	55	砂岩	(4.85)	(4.85)	0.99	(30.6)	左辺 基辺	両面 両面	凸形 平形	45 60	打製石斧か	33	8
-	SI 1	1	22	チャート	1.5	2.3	0.4	1.7	基辺	両面	凸形	57	自然面・節理面あり	-	-

## 微細な剥離痕を有する剥片

No	地区・ 遺構	層位	整理 No	石材	長さ	幅	厚さ	質量	剥離痕のある縁辺の状況			備考	挿図	図版	
									位置	剥離	平面形	角度			
35	SK47	I	49	チャート	2.9	3.8	0.5	6.9	右辺	両面	平形	41		31	8
49	F 4	III	97	チャート	2.2	2.4	0.5	2.8	右辺 左辺	片面 片面	凸形 凸形	57 65	剥離痕は両 側縁にある	33	8
50	SD 1	I	29	チャート	2	3.2	0.45	2.8	末辺	片面	凸形	41	遺構は中世 以降	33	8
51	F 4	II	105	チャート	2.5	2.9	0.5	3.9	基辺 末辺	片面 片面	平形 凸形	50 49		33	8
52	SK67	2	33	チャート	2.8	2.5	0.5	3.8	右辺 左辺	両面 片面	平形 平形	41 48	遺構は平安 時代	33	8

## 石錘

No	地区・ 遺構	層位	整理 No	石材	長さ	幅	厚さ	質量	紐掛け部計測			質量	分類	残存	挿図	図版
									L	W	S					
38	SK68	I	46	泥岩	5.3	3.2	1.4	5.15	0.7	0.68	28.7	打欠+切目	完	31	8	
53	G 2	V	101	砂岩	5.4	3.8	1.5	5.3	0.47	0.66	40.6	打欠	完	33	8	
54	F 4	II	23	砂岩	(3.7)	4.25	1.25	(3.1)	0	1.58	(23.4)	打欠	1/2	33	8	

## 石皿

No	地区	層位	整理No	石材	長さ	幅	厚さ	質量	備考	挿図	図版
41	SK108	I	83	砂岩	24.5	(21.5)	7	(5400)	表面と側面に磨面あり	31	9

## 凹石

No	地区	層位	整理No	石材	長さ	幅	厚さ	質量	備考	挿図	図版
55	H 4	II	14	砂岩	12.1	9.1	3.5	485.4	表面中央に敲打痕が不定形 に集中し、凹みを形成する	33	9

## 第6節 トレンチ調査の結果

トレンチ調査は、当初調査地の土層堆積状況を確認することが目的であったが、確認調査では検出できなかった（確認調査では打製石斧1点のみ出土）、縄文時代の遺構・遺物を発掘調査において検出したため、この遺構・遺物の広がりを把握することも必要となった。

トレンチは、各土層が比較的厚く堆積していると思われる、調査区の中央部分にTR 4～TR10の7箇所を設定した（図29）が、このうちTR 9とTR10は、調査途中に追加したものである。

**TR 4（図34）** 幅1m、長さ9mのトレンチを谷状に凹み、最も土層が厚く堆積している、調査区南壁に沿って設定した。Ⅲ層上面では倒木痕を、VI層上面ではSK114を検出している。このトレンチの東西は徐々に土層の堆積が薄くなる。

**TR 5（図35）** 幅1m、長さ20mのトレンチを、調査区の中央部分に東西方向に設定した。VI層上面でSK115とSK116を検出したほか、平安時代の遺構面では認識できなかったが、Ⅲ層上面に倒木痕を確認した。

**TR 6（図34）** 幅1m、長さ9mのトレンチを、調査区北壁の中央部分に沿って設定した。VI層上面で、SP 1～SP 3に直交する方向にSP 5を検出した。Ⅲ層上面では確認できていないが、SP 5では柱痕跡が確認できたことにより、掘立柱建物跡の柱穴と認識した。また、1994年試掘調査坑の北西隅にあった小土坑が、SP 1とSP 5の延長線上にあることも判明したため、これをSP 6とした。

**TR 7** 2m四方のトレンチを、SK107掘削により想定される土坑が含まれるように設定した。トレンチを半割してⅢ層を除去したところ、土坑のプランが確認できたため、これをSK113として調査した。Ⅲ層下は、TR 4での層序と同じくV層となり、SK113はV層上面で検出している。

**TR 8（図36）** 幅1m、長さ17mのトレンチを、調査区中央にTR 5と直交するよう南北方向に設定した。基本層序を設定したTR 1と一部重複するトレンチで、基本層序のⅢ層からVI層を確認したが、IV層は南端にあるSK113のやや北側でなくなっている。

**TR 9** 幅1m、長さ5mのトレンチを、SK64とSK113を結ぶライン上に設定した。これは調査時点ではSK64も縄文時代の落とし穴の可能性を考えていたためであり、IV層～V層が堆積している部分で土坑の有無を確認する目的であった。しかし、遺構は検出できなかった。

**TR10** TR 6掘削により確認できたSP 5～SP 6によって、掘立柱建物跡の規模が2間×2間を推定できたが、残りの2基の柱穴がⅢ層上面では確認できなかった。このため、2基の柱穴が想定できる場所に幅1m、長さ3mのトレンチを設定した。約5cmほど掘り下げたところ2基の柱穴を確認することができ、これをSP 7、SP 8とした。

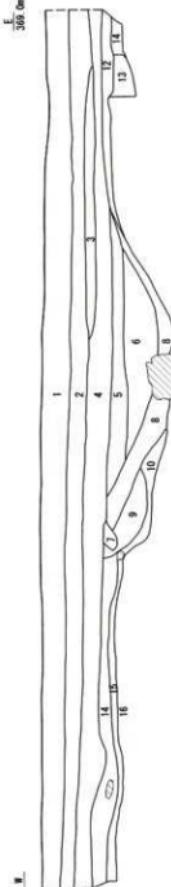
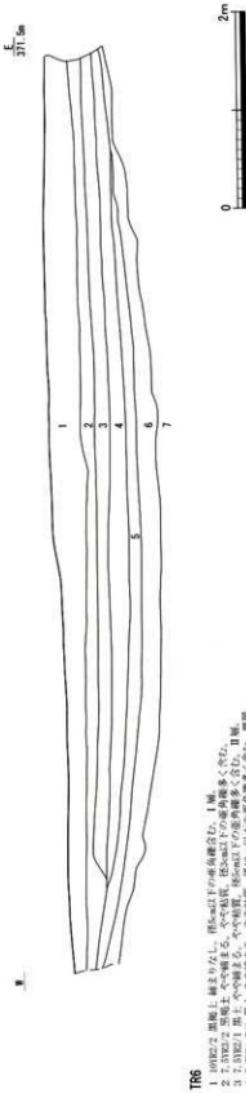


図34 TB 4・TB 6主層断面図 (S=1/50)



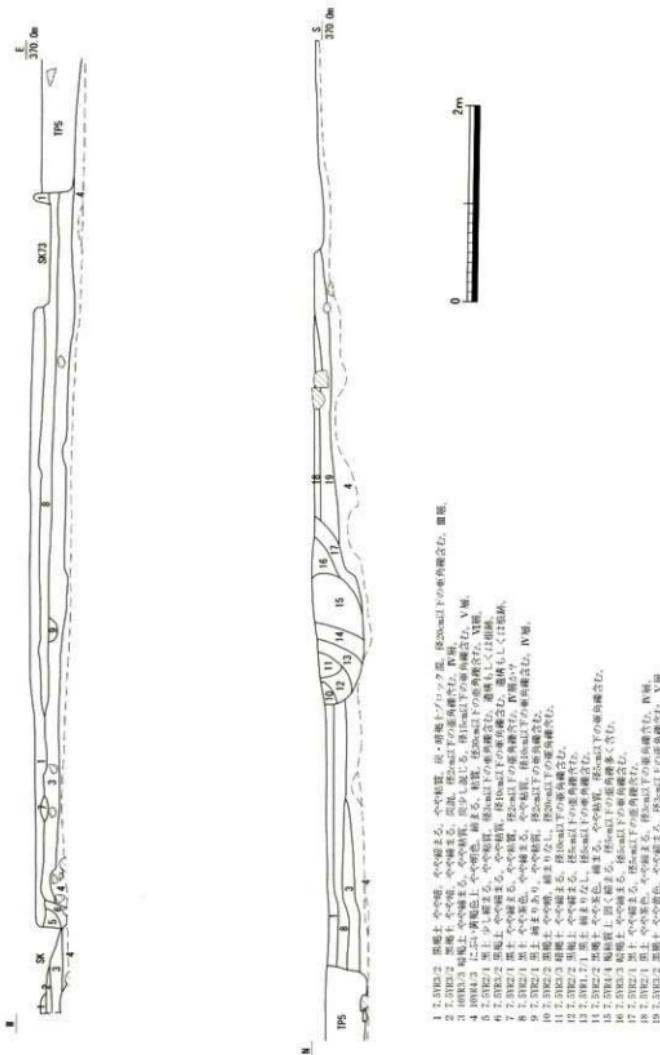


図35 TR 5 土層断面図 (S=1/50)

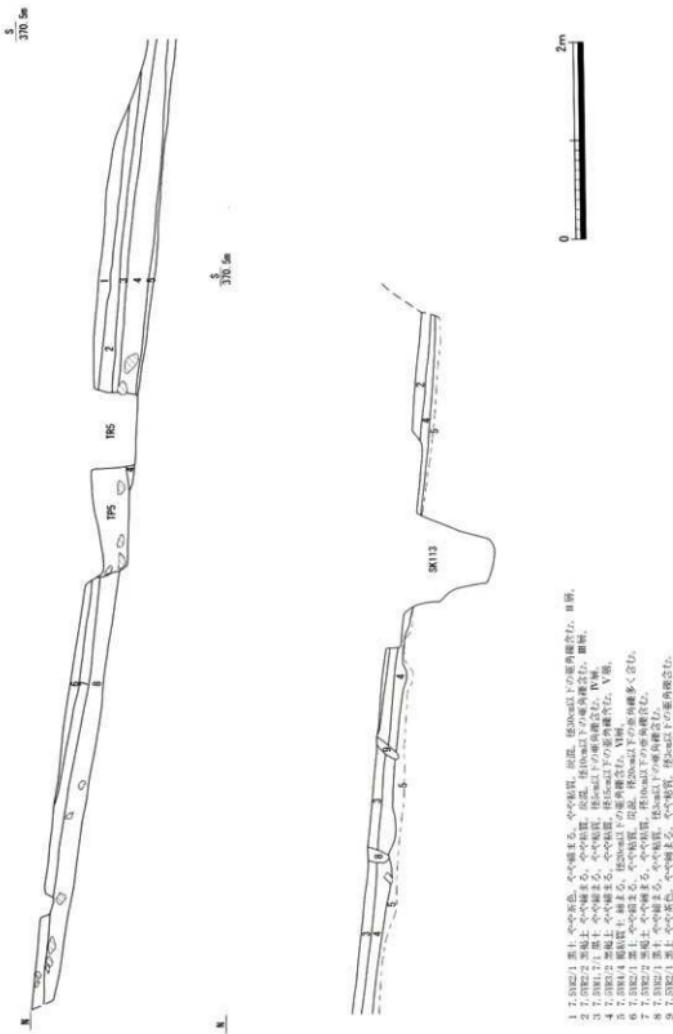


図36 TR 8 土層断面図 (S = 1/50)

## 第4章 自然科学分析

### 第1節 放射性炭素年代測定

山形 秀樹（パレオ・ラボ）

#### 1 はじめに

寺平遺跡より検出された炭化材の加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を実施した。

#### 2 試料と方法

試料は、SK64埋土下層から出土した炭化材1点である。

試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨（グラファイト）に調整した後、加速器質量分析計（AMS）にて測定した。測定された<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した<sup>14</sup>C濃度を用いて<sup>14</sup>C年代を算出した。

#### 3 結果

表1に、試料の同位体分別効果の補正值（基準値-25.0‰）、同位体分別効果による測定誤差を補正した<sup>14</sup>C年代、<sup>14</sup>C年代を曆年代に較正した年代を示す。

<sup>14</sup>C年代値（yrBP）の算出は、<sup>14</sup>Cの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した<sup>14</sup>C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、計数値の標準偏差 $\sigma$ に基づいて算出し、標準偏差（One sigma）に相当する年代である。これは、試料の<sup>14</sup>C年代が、その<sup>14</sup>C年代誤差範囲内に入る確率が68%であることを意味する。

表18 放射性炭素年代測定および曆年代較正の結果

測定番号 (測定法)	試料データ	$\delta^{14}\text{CPdB}$ (‰)	<sup>14</sup> C年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	14C年代を曆年代に較正した年代	
				曆年代較正値	1 $\sigma$ 曆年代範囲
PLD-1220 (AMS)	炭化材 SK64 埋土下層	-25.9	300 $\pm$ 30	cal AD 1635	cal AD 1520-1580(74.0%) cal AD 1625-1645(26.0%)

なお、曆年代較正の詳細は、以下の通りである。

#### 曆年代較正

曆年代較正とは、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された<sup>14</sup>C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、および半減期の違い（<sup>14</sup>Cの半減期5,730  $\pm$  40年）を較正し、より正確な年代を求めるために、<sup>14</sup>C年代を曆年代に変換することである。

具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚のU-Th年代と<sup>14</sup>C年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて<sup>14</sup>C年代と曆年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて<sup>14</sup>C年代を曆年代に較正した年代を算出する。

<sup>14</sup>C年代を曆年代に較正した年代の算出にCALIB 4.3(CALIB 3.0のバージョンアップ版)を使用した。なお、曆年代較正値は<sup>14</sup>C年代値に対応する較正曲線上の曆年代値であり、1σ曆年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された<sup>14</sup>C年代誤差に相当する曆年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその1σ曆年代範囲の確からしさを示す確率であり、10%未満についてはその表示を省略した。1σ曆年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、表中に影付け部分で示した。

#### 4 考察

試料は、同位体分別効果の補正および曆年代較正を行なった。曆年代較正した1σ曆年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲に注目すると、炭化材はcal AD 1520-1580年が、より確かな年代値の範囲として示された。

#### 引用文献

- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の<sup>14</sup>C年代, p.3-20.
- Stuiver, M. and Reimer, P. J. (1993) Extended <sup>14</sup>C Database and Revised CALIB3.0 <sup>14</sup>C Age Calibration Program, Radiocarbon, 35, p.215-230.
- Stuiver, M., Reimer, P.J., Bard, E., Beck, J.W., Burr, G.S., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, F.G., v.d. Plicht, J., and Spurk, M. (1998) INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000 - 0 cal BP, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

## 第2節 灰釉陶器の黒色付着物のFT-IR分析

藤根 久 (パレオ・ラボ)

### 1 はじめに

寺平遺跡では、平安時代の灰釉陶器の内面や外面に漆質物が付着して出土した。ここでは、この付着物の材料分析（フーリエ変換型赤外分光光度計）を行った。なお、比較試料として、藤橋村（旧徳山村）の寺屋敷遺跡および上原遺跡の灰釉陶器に付着する漆質物についても同様に検討した（図版10）。

### 2 試料と方法

試料は、寺平遺跡から出土した灰釉陶器付着物2試料、寺屋敷遺跡から出土した灰釉陶器付着物2試料、上原遺跡から出土した灰釉陶器付着物1試料である（表26）。

試料は、各灰釉陶器の内側付着物から一部（約1mm角片）を取り出した後、エタノールで洗浄・乾燥した後、臭化カリウム（KBr）結晶板に挟んで、約7トンで加圧して測定用錠剤を作成した（KBr錠剤法）。

作成したKBr錠剤は、フーリエ変換型赤外分光光度計（FT-IR；日本分光株製 FT/IR-410、IRT-30-16）を用いて透過法により赤外線吸収スペクトルを測定し、生漆などの標準試料の赤外線吸収測定スペクトルと比較して、付着物の同定を行った。

表19 FT-IR分析を行った灰釉陶器と黒色付着

No	遺跡名	報告書 掲載番号	試料No	遺物名	器種	付着状況			
						付着物	内側	外側	断面
1	寺平遺跡	国14-1	①	灰釉陶器	折縁皿	黒色	○	○	○
2		国14-2	②	灰釉陶器	椀底部	黒色	○	○	○
3	寺屋敷遺跡	第29図7	①	灰釉陶器	椀底部	黒色	○	○	○
4		第29図13	②	灰釉陶器	輪花椀	黒色	○	△	×
5	上原遺跡第2地点	本書図39	①	灰釉陶器	椀底部	黒色	△	×	×

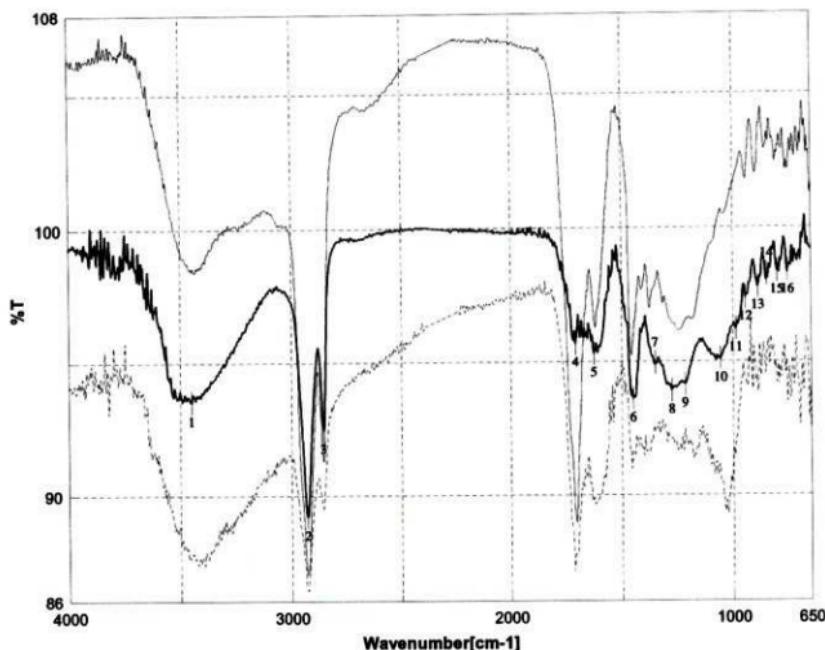
### 3 結果および考察

図37～図39に、各遺跡の灰釉陶器付着物と生漆の赤外線吸収スペクトル図を示す。なお、縦軸は透過率（%T）、横軸が波数（Wavenumber; cm<sup>-1</sup>、カイザー）である。ピーク検出結果一覧は、生漆の赤外線吸収位置を示す。

生漆の赤外吸収スペクトルでは複数の吸収が見られるが、このうち漆としては2929、2855、1707、1619、1458cm<sup>-1</sup>などが特徴的な吸収である。2400～3600cm<sup>-1</sup>のブロードな吸収は、カルボン酸に特徴的な吸収である。2929および2855cm<sup>-1</sup>の2本の吸収は、バラフィン炭化水素の吸収である。さらに、700～1600cm<sup>-1</sup>の複数の吸収は芳香族に見られる吸収である。

各遺跡から出土した灰釉陶器付着物では、2400～3600cm<sup>-1</sup>のブロードな吸収や2929、2855、1707、1620、1457、1246cm<sup>-1</sup>など共通の吸収が複数見られた。こうしたことから、遺跡試料であるため必ずしも同一スペクトルは得られないが、いずれの試料もほぼ漆と同定される。なお、吸収度合の違いは、試料の厚さの違いによるものである。なお、灰釉陶器の外側においても付着物が見られる試料が

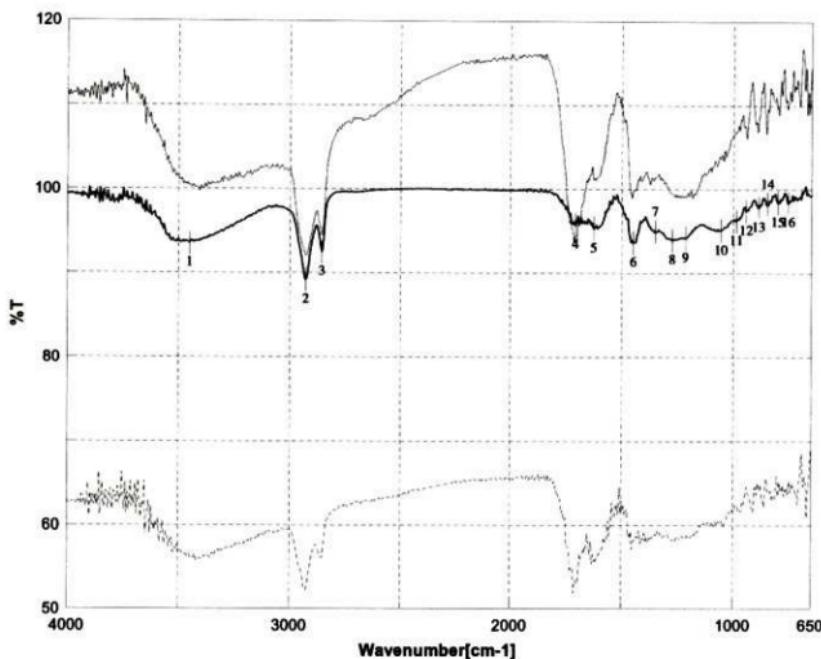
多いが、測定により内側付着物と同様のスペクトルが得られたことから、漆と同定される。



No.	位置	強度
1:	3449.06	93.5368
2:	2928.38	89.1931
3:	2856.06	92.4929
4:	1708.62	95.6856
5:	1626.66	95.3059
6:	1450.21	93.6168
7:	1349.93	94.9413
8:	1276.65	93.9144
9:	1215.90	94.1453
10:	1056.80	95.0817
11:	987.38	96.2200
12:	943.98	97.3999
13:	888.06	97.8158
14:	848.53	98.2700
15:	801.28	98.3933
16:	754.03	98.3938

—	生漆jws
---	寺平①jws
---	寺平②jws

図37 寺平遺跡灰釉陶器内側付着物および生漆のFT-IRスペクトル図  
縦軸が透過率（%T）、横軸が波数（cm<sup>-1</sup>、カイザー）

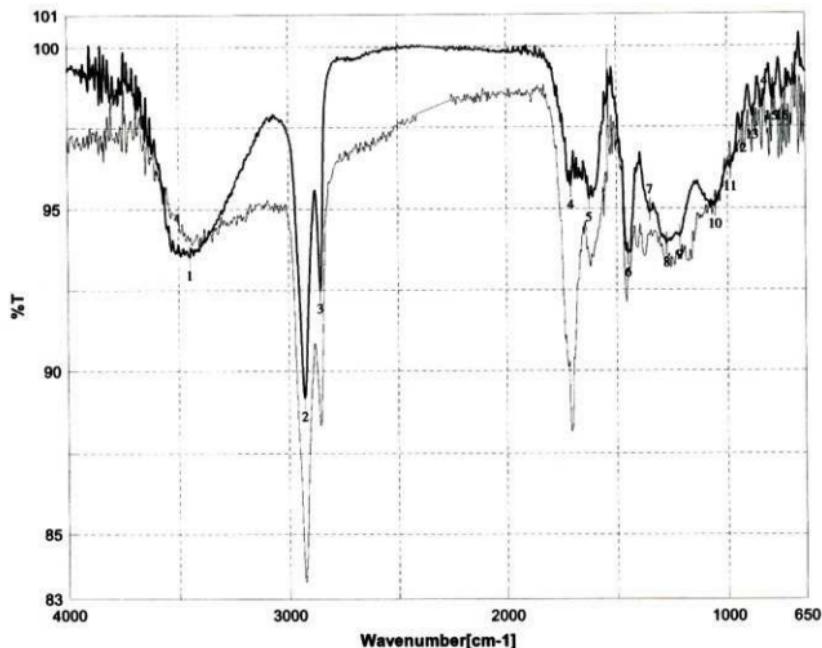


## ピーク検出結果

No.	位置	強度
1:	3449.06	93.5368
2:	2928.38	89.1931
3:	2856.06	92.4929
4:	1708.62	95.6856
5:	1626.66	95.3059
6:	1450.21	93.6168
7:	1349.93	94.9413
8:	1276.65	93.9144
9:	1215.90	94.1453
10:	1056.80	95.0817
11:	987.38	96.2200
12:	943.98	97.3999
13:	888.06	97.8158
14:	848.53	98.2700
15:	801.28	98.3933
16:	754.03	98.3938

—— 生漆jws  
- - - 寺屋敷①jws  
- · - 寺屋敷②jws

図38 寺屋敷遺跡灰釉陶器内側付着物および生漆のFT-IRスペクトル図  
縦軸が透過率（%T）、横軸が波数（cm⁻¹、カイザー）



No.	位置	強度
1:	3449.06	93.5368
2:	2928.38	89.1931
3:	2856.06	92.4929
4:	1708.62	95.6856
5:	1626.66	95.3059
6:	1450.21	93.6168
7:	1349.93	94.9413
8:	1276.65	93.9144
9:	1215.90	94.1453
10:	1056.80	95.0817
11:	987.38	96.2200
12:	943.98	97.3999
13:	888.06	97.8158
14:	848.53	98.2700
15:	801.28	98.3933
16:	754.03	98.3938

生漆 jws  
上原①jws

塗付着灰釉陶器



図39 上原遺跡第2地点灰釉陶器内側付着物および生漆のFT-IRスペクトル図  
縦軸が透過率 (%T)、横軸が波数 (cm<sup>-1</sup>、カイザー)

## 第5章 まとめ

### 1 平安時代の遺構・遺物について

平安時代の遺構として、礎石建物跡1棟、掘立柱建物跡1棟のほか、集石遺構、焼土、土坑などを検出した。これらの遺構が同時期に存在していたのか否かは、出土した遺物量が少ないとあって明確にできない。しかし、礎石建物跡と掘立柱建物跡は、礎石掘形や柱穴内から出土した灰釉陶器が10世紀前半代のものであることから、ほぼ同じ頃に建てられていたものと思われる。包含層から出土した灰釉陶器の年代は、9世紀末から10世紀初頭のものが最も古く、10世紀後半のものまであるが、主体となるのは10世紀前半代である。よって、9世紀末頃からこの地で何らかの活動が行われるようになり、10世紀前半代を中心として様々な遺構が構築され、遺物が確認できなくなる11世紀には廃絶しているものと思われる。

この遺跡で特筆すべき遺構は、平安時代の礎石建物跡である。後世の土地利用による影響で、一部の礎石と据え付け穴を確認できただけであり、建物の規模を明確にすることはできなかったが、礎石建物の建物であることから、宗教的な施設と推定される。掘立柱建物跡は、ほぼ同時に存在していたと思われることから、関連する施設であろう。

徳山地区では、寺屋敷遺跡でも礎石建物跡が検出されている。灰釉陶器多口瓶や鉄釘、螺髮などの出土と合わせて、仏堂のような宗教的施設と考えられる（三島・藤根2001）。寺平遺跡では、出土遺物の中に仏具のようなものはないが、寺屋敷遺跡と共に通ずる遺物として、漆が付着した灰釉陶器をあげることができる<sup>1)</sup>。出土した灰釉陶器片50点のうち11点に漆が付着していたが、取り上げ後、乾燥して簡単に剥落してしまうものが多いことから、本来はより多くの土器片に付着していた可能性がある。漆の付着状況は、内外面に少量の漆が確認できる程度のものから、内外面に厚く付着し、底部外面や割れた断面にまで付着しているものまである。このため、単に漆液容器として使用されたことにより、漆が付着したものとは考えにくい。また、寺屋敷遺跡においても、報告されている22点の灰釉陶器のうち、8点に漆が付着し、その付着状況は寺平遺跡のものと同様である。他にも上原遺跡第2地点で、椀の内面に少量の漆が付着した灰釉陶器が1点出土している<sup>2)</sup>。この3遺跡のうち、漆が付着した灰釉陶器が多く出土した2遺跡では、礎石建物跡を検出している点が注目される。灰釉陶器の内外面に漆が付着していることが、宗教的な活動の産物なのか、漆生産に関係するものなのか、2遺跡の調査結果からだけでは判断できないが、宗教的な施設である礎石建物と何らかの関連性をうかがわせる。

徳山地区では、縄文時代の遺跡は数多く、発掘調査でも多数の遺構・遺物を検出しているが、弥生時代になると遺跡数・遺構数は激減し、古墳時代の遺跡は確認されていない。奈良時代終わり頃になつて、再び遺構・遺物が少量認められるようになり、平安時代に増加している。特に10世紀代の遺構・遺物は比較的多く（表20）、この時期に人々の活動が活発であったことがうかがわれる。しかし、平安時代の建物遺構として検出されているのは、上記の2遺跡のほか、上原遺跡第2地点と第3地点の合わせて2棟の掘立柱建物跡があるだけである。

上原遺跡第2地点では、掘立柱建物跡を1棟検出しており（河村・近藤ほか1997）、漆が付着した灰釉陶器はそこから50mほど南の位置で出土している。このことだけで掘立柱建物跡に宗教的な施設の

可能性を考えるのは早計であるが、他の掘立柱建物跡と比較して規模が大きいこと、第2地点からは越州産の青磁碗が出土していることも合わせて、宗教的な施設である可能性があるものと考えたい。また、もう1棟の掘立柱建物跡を検出した上原遺跡第3地点でも、朱墨が残る転用硯<sup>33</sup>（灰釉陶器）が出土しており、宗教的な要素を認めることができる。

寺平遺跡や寺屋敷遺跡は、礎石建物跡の存在から宗教的な施設の場と考えられるが、これらの礎石建物を構築した人々の集落はどこに営まれていたのか、これまでの徳山地区の発掘調査では不明である。また、上原遺跡第2地点・第3地点の掘立柱建物跡に関しても、上述のように宗教的な施設の可能性を示しており、徳山地区でこれまでに検出されている平安時代の建物跡は、いずれも宗教的な施設かその可能性が考えられる施設となる。

このような宗教的な施設（可能性が考えられるものも含めて）を、村落寺院（田中1984）や村落内寺院（須田1985）と呼ばれる遺構（遺跡）と比較した場合、それらが定義されている時期は異なるが、宗教的施設を建立し、維持・運営していた人々の生活の場が、寺平遺跡や寺屋敷遺跡では確認できないことが、最も大きな違いと思われる。徳山地区でのこれまでの発掘調査では、古代の堅穴住居跡を検出した例はなく、また、掘立柱建物跡も上記の例を除いては中世まで降るものしかない。美濃地方平野部では、9世紀後葉から10世紀前葉にかけて堅穴住居跡が確認できなくなる状況があり、この理由を堅穴住居から平地住居への移行によるもので、これが平野部から山間部へ次第に波及したとの考え方がある（渡辺1998）。徳山地区的場合、遺跡・遺構の遺存状態から古代以降の生活面は、中世から現代に至る様々な活動によって大きく損なわれている可能性が高く、仮に平地住居に居住していたとすれば、それを発掘調査によって遺構として認識することは困難と思われる<sup>34</sup>。しかし、出土している遺物量は、上原遺跡第2地点で700点を超える<sup>35</sup>ほかは、数点から数十点しかない。有機質の食器を用いていたことも考慮しなければならないが、遺構の少なさも合わせて考えると、継続的な居住施設が存在していた可能性は低く、小規模かつ短期的な活動を繰り返していたのではないかと思われる。

宗教的施設が存在していた当時の集落に関しては、これまでの発掘調査で確認されていない以上、把握することができない。しかし、9世紀に入って徐々に出土し始める遺物によって、徳山地区で何らかの活動が始まられたことがうかがえる。上原遺跡第3地点の掘立柱建物跡は、周囲から出土している灰釉陶器により、9世紀後半から10世紀のものと推定できる。同じ頃、尾元遺跡には水場遺構が

表20 主な平安時代遺跡の消長

遺跡名	建物遺構	9世紀	10世紀	11世紀
塚遺跡	なし			
寺平遺跡	礎石建物跡 掘立柱建物跡			
寺屋敷遺跡	礎石建物跡			
磯谷口遺跡	なし			
山手宮前遺跡	なし			
尾元遺跡	なし			
上原遺跡第2地点	掘立柱建物跡			
上原遺跡第3地点	掘立柱建物跡			

遺物が確認できる時期

■ 遺構の存続時期（遺物から想定）

あり、トチの実の加工処理を行っている。9世紀後半頃の遺物は、寺平・寺屋敷・磯谷口・山手宮前などの各遺跡でも確認できるが、10世紀に入って増加する。上原遺跡第2地点<sup>6)</sup>の掘立柱建物跡、寺平遺跡の礎石建物跡や掘立柱建物跡も10世紀に建てられたものと思われる。寺屋敷遺跡の礎石建物跡は、これらよりもやや遅れて建てられたものであろう。11世紀には遺物量が減少し、これらの建物跡は11世紀中には廃絶されたと思われるが、その要因は今のところ不明であり、次に遺構が確認されるようになるのは13世紀以后のことになる。

以上のように、平安時代の徳山地区では、宗教的な施設を核として何らかの活動が行われていたことが推測される。具体的にどのような活動であったのかは不明であるが、その背景として白山信仰の存在が考えられるのではないか。白山山頂部では、9世紀後半の可能性がある遺物が確認されており、能郷白山山頂でも平安時代と思われる遺物が採集されている(宮本1997)。宗教的な施設が造られた背景として、徳山地区が能郷白山の西南麓に位置することから、白山信仰との関連性が想像される。直接白山信仰に結びつけられるような遺構・遺物がないこと、能郷白山に関する史料が非常に少なく、歴史的・民俗的な調査があまり進んでいないことなどから、想像の域を出るものではない。しかし、能郷白山は、白山を中心とした山岳修験聖地の一つと位置づけられ、寺平遺跡や寺屋敷遺跡の背後の尾根を登れば、能郷白山に迫り着くことができる。現状では、能郷白山西南麓に位置する遺跡群を、理解するための手がかりの一つとして、白山信仰との関連性を考えておきたい。

- 1) 報告書(三島・藤根2001)では、第29図14の灰釉陶器に漆と思われるものが付着していると記述されているが、ほかに同図3、5~7、9、11、13や未実測破片に漆状のものが付着しており、このうちの7と13について付着物の同定のため分析を行った(第4章第2節)。
- 2) 報告書(河村・近藤ほか1997)には掲載されていない灰釉陶器の中に、漆状のものが少量付着した灰釉陶器片が1点あり、付着物の同定のため分析を行った(第4章第2節)。参考までに実測図を図39に掲載した。
- 3) 渡辺博氏の御教示による。なお、報告書(堀田・鈴木ほか2000)では、転用硯の可能性が高いが断定できないとされている。
- 4) これまでに行われた徳山地区の発掘調査では、古代以降の単純な包含層を見いだすことは難しく、刊行されている発掘調査報告書の中でも、表土下には縄文時代の遺物包含層が存在する遺跡が多い。安易な考え方ではあるが、縄文時代の集落形成が終わった後、古代や中世の遺構面が存在していたとしても、現代に至るまで土砂の堆積が少ないため、近世から現代における開墾や宅地化により、古代以降の遺構や遺物包含層は大きなダメージを受けたと予想される。寺平遺跡や寺屋敷遺跡で古代の遺物包含層が確認できたのは、尾根上の緩斜面にある狭い平坦地に立地するため、開墾が遅れるとともに、山側からの土砂の供給がほかの河岸段丘上と比較して多かったためではないかと思われる。地山まで掘り込まれた掘立柱建物跡の柱穴や土坑のような遺構であれば、発掘調査によって検出することができる。しかし、その掘り込みが縄文時代の包含層内で終わっていたり、焼土面のような掘り込みを持たない遺構の場合は、検出することが相当に困難なものと思われる。
- 5) 小野木氏の御教示による。なお、上原遺跡第2地点は、徳山地区的発掘調査では灰釉陶器が最も多く出土しているとのことである。
- 6) 建物の規模が大きいこと、遺物量が多いことから、当地が10世紀から11世紀における徳山地区の中心的な場所であった可能性が高い。

## 2 繩文時代の遺構・遺物について

繩文時代の遺構は、土坑を確認しただけである。しかし、SK113は落とし穴と思われ、徳山地区の発掘調査では初見であり、県内でも検出例は少ない<sup>7)</sup>。SK47、SK68、SK108は、遺物の出土状況や埋土の堆積状況から、墓坑（土坑墓）の可能性が考えられる。美濃地方において土坑墓が検出される遺跡では、堅穴住居跡も確認できる例が後期頃までは一般的であり、土坑墓あるいは土器棺墓だけで構成される遺跡は、後期後葉以降になって明確になる。前期後葉や中期後葉の集落跡が、数多く検出されている徳山地区でも同様であるが、寺平遺跡では居住施設と思われるような遺構を検出することはできなかった。隣接する長吉遺跡においても、遺構は晚期の土器棺墓のみで、中期前葉の遺物は出土していない。また、0.6kmほど上流に位置する塚遺跡でも、中期前葉の遺物は出土していない。このため、墓に埋葬された人々、あるいは埋葬した人々が日々暮らしていた集落が確認できない状況である<sup>8)</sup>。

寺平遺跡は遺物量も少なく、居住施設も確認できなかったことから、繩文時代には短期的な活動の場と考えることがある。それが最初に行われたのは早期押型文の時期で、中期前葉においては埋葬の場として使用されている<sup>9)</sup>。SK113に遺物が伴わないので時期は不明であるが、小動物の獲得の場として使用されていたときもある。徳山地区において、中期前葉ではどこに居住施設を構えていたのかが今後の課題となる。

7) 中期とされる落とし穴状遺構が、2遺跡（西ヶ洞古墳群・造道遺跡）で確認されている（春日井2001）。

8) 寺平遺跡は、狭い平坦地に位置するが、今回の調査はこのほぼ全面を対象として行っていることから、調査区の外は傾斜のきつい斜面と崖面になってしまい、居住のための施設が存在する可能性は低い。

9) SK68とSK108の時期は不明であるため、ほかの時期においても埋葬の場として使用されていた可能性がある。

## 3 おわりに

今回の調査では、繩文時代と平安時代の遺構・遺物を検出した。繩文時代には、早期前半と中期前葉の短期的な活動痕跡を確認した。その内容は、早期前半は不明であるが、中期前葉は埋葬の場として利用されていた可能性がある。また、時期が不明ではあるが、落とし穴状遺構や土坑墓と思われる遺構もあり、他の時期にも食料獲得の場、埋葬の場として利用されていた。

平安時代には、宗教的な施設が建てられているが、小規模なお堂のような建物であった。漆が付着した灰釉陶器は、同じ頃の寺屋敷遺跡でも出土しており、遺構や遺物に両遺跡の共通性が認められた。また、上原遺跡で検出されている掘立柱建物跡に関して、宗教的な要素が遺物から認められた。このような宗教的な施設を核とした遺跡が、耕作適地が少ない山間部に出現する理由を、様々な観点から検討する必要があると思われる。

## 参考文献

- 浅野哲男・河瀬実浩ほか 2000 「岩井谷遺跡」(岐阜県文化財保護センター調査報告書第60集)、(財)岐阜県文化財保護センター
- 浅野哲男・坂東肇ほか 2002 「徳山陣屋跡」(岐阜県文化財保護センター調査報告書第76集)、(財)岐阜県文化財保護センター
- 池谷勝典 2001 「打製石斧研究の着眼点」『佐久考古通信』No.82、佐久考古学会
- 泉拓良 1988 「船元・里木式土器様式」『繩文土器大観3 中期II』、小学館
- 五十川伸矢 1992 「古代・中世の鉄鋳物」『国立歴史民俗博物館研究報告』第46集、国立歴史民俗博物館
- 1996 「古代から中世前半における鉄鋳物生産」『季刊考古学』第57号、雄山閣出版株式会社
- 井上喜久男 1992 「尾張陶磁」、ニューサイエンス社
- 宇野隆夫 1992 「食器量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集、国立歴史民俗博物館
- 1996 「中世土鍋が意味するもの -形容詞がある土器-」『鍋と甕そのデザイン』(第4回東海考古学フォーラム)、東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
- 春日井恒 2001 「岐阜県における生業関係遺構の現状」『関西繩文時代の生業関係遺構-獲得・加工・貯蔵・廃棄の諸相-』発表要旨集(第3回関西繩文文化研究会)、関西繩文文化研究会
- 2003 「尾元遺跡」(岐阜県文化財保護センター調査報告書第82集)、(財)岐阜県文化財保護センター
- 河村一彦・近藤大典ほか 1997 「上原遺跡I」(岐阜県文化財保護センター調査報告書第36集)、(財)岐阜県文化財保護センター
- 岐阜県教育委員会 1985 「揖斐川上流域徳山ダム・杉原ダム水没地区埋蔵文化財分布調査報告書」(財)岐阜県文化財保護センター 1997 「'97岐阜県新発見考古速報」  
1998 「'98岐阜県新発見考古速報」  
1999 「'99岐阜県新発見考古速報」
- 小池岳史・柳川英司 1994 「立石遺跡-平成5年度県営圃場整備事業堀地区に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書-」、茅野市教育委員会
- 小谷和彦・中島康夫ほか 1997 「山手宮前遺跡」(岐阜県文化財保護センター調査報告書第28集)、(財)岐阜県文化財保護センター
- 小林昌二 1993 「15中部山岳信仰と諏訪の神」「新版古代の日本」第7巻中部、株式会社角川書店
- 齐藤孝正 1995 「I 東海西部」「須恵器集成図録」第3巻東日本編I、雄山閣出版株式会社
- 篠田通弘・千葉克彦ほか 1994 「長吉遺跡・普賢寺跡」(岐阜県文化財保護センター調査報告書第12集)、(財)岐阜県文化財保護センター
- 篠田通弘・増子誠ほか 1998 「塚遺跡」(岐阜県文化財保護センター調査報告書第27集)、(財)岐阜

## 県文化財保護センター

- 菅原章太 1997 「墨書き土器の機能に関する一論試－特に古代村落祭祀とのかかわりについて－」『堅田直先生古希記念論文集』堅田直先生古希記念論文集刊行会編、真陽社
- 鈴木康二 1995 「「道具」としての石器を考える」『旧石器考古学』第50号、旧石器文化談話会
- 須田勉 1985 「平安初期における村落内寺院の存在形態」『古代探査Ⅱ－早稲田大学考古学会創立35周年記念考古学論集－』、早稲田大学出版部
- 田中文英 1984 「中世前期の寺院と民衆」『日本史研究』266、日本史研究会
- 趙哲済 1983 「遺構検出面の便宜的な呼称」『長原遺跡発掘調査報告Ⅲ』、財団法人大阪市文化財協会
- 戸津圭之介 1998 「鎔金の技法 古代鑄造文化財の技法研究と今後の課題」『弥生時代の鎔造－青銅器鑄造技術の復元－』(第8回鎔造遺跡研究集会)、鎔造遺跡研究会
- 徳山村の歴史を語る会 1984 「徳山村のあけばのを求めて」
- 徳山村役場 1973 『徳山村史』
- 堀田一浩・鈴木隆雄ほか 2000 「上原遺跡Ⅱ」(岐阜県文化財保護センター調査報告書第54集)、(財)岐阜県文化財保護センター
- 三島誠・藤根久 2001 「寺屋敷遺跡・磯谷口遺跡」(岐阜県文化財保護センター調査報告書第35集)、(財)岐阜県文化財保護センター
- 水資源開発公團徳山ダム建設所 1987 『美濃徳山の地名』
- 前川要 1984 「猿投窯における灰釉陶器生産最末期の諸様相－瀬戸市百代寺窯出土遺物を中心として－」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅲ』、瀬戸市歴史民俗資料館
- 間壁忠彦・間壁茂子 1971 「里木貝塚」『倉敷考古館研究集報』第7号、(財)倉敷考古館
- 宮本哲郎 1997 「能郷白山でみつけた遺物の紹介」『石川県考古学研究会々誌』第40号、石川県考古学研究会
- 渡辺博人 1998 「美濃各務原地域における古代の集落遺跡について」『岐阜史学』第92号、岐阜史学会
- 渡辺博人・齊藤基生ほか 1999 『蘇原東山遺跡群発掘調査報告書』(各務原市文化財調査報告第26号)、各務原市埋蔵文化財調査センター
- 渡辺誠・齊藤基生ほか 1985 「阿曾田遺跡発掘調査報告書－阿木川ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査－」、中津川市教育委員会

# 写 真 図 版



1 寺平遺跡全景

図版 2



1 調査区全景



2 碓石建物跡全景



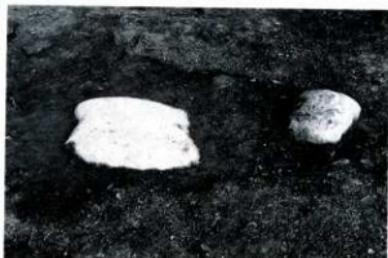
1 SK64土層



2 SK64



3 SS1(礎石建物跡)



4 SS2(礎石建物跡)



5 础石建物跡(北側礎石)



6 小土坑列

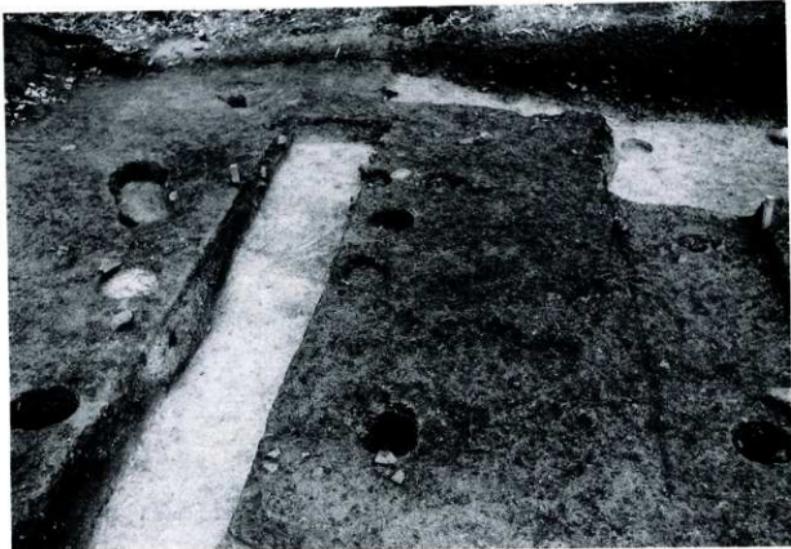


7 SI1



8 SI2

図版 4



1 挖立柱建物跡



2 挖立柱建物跡



3 SP3土層



4 SP4



5 SP8確認状況

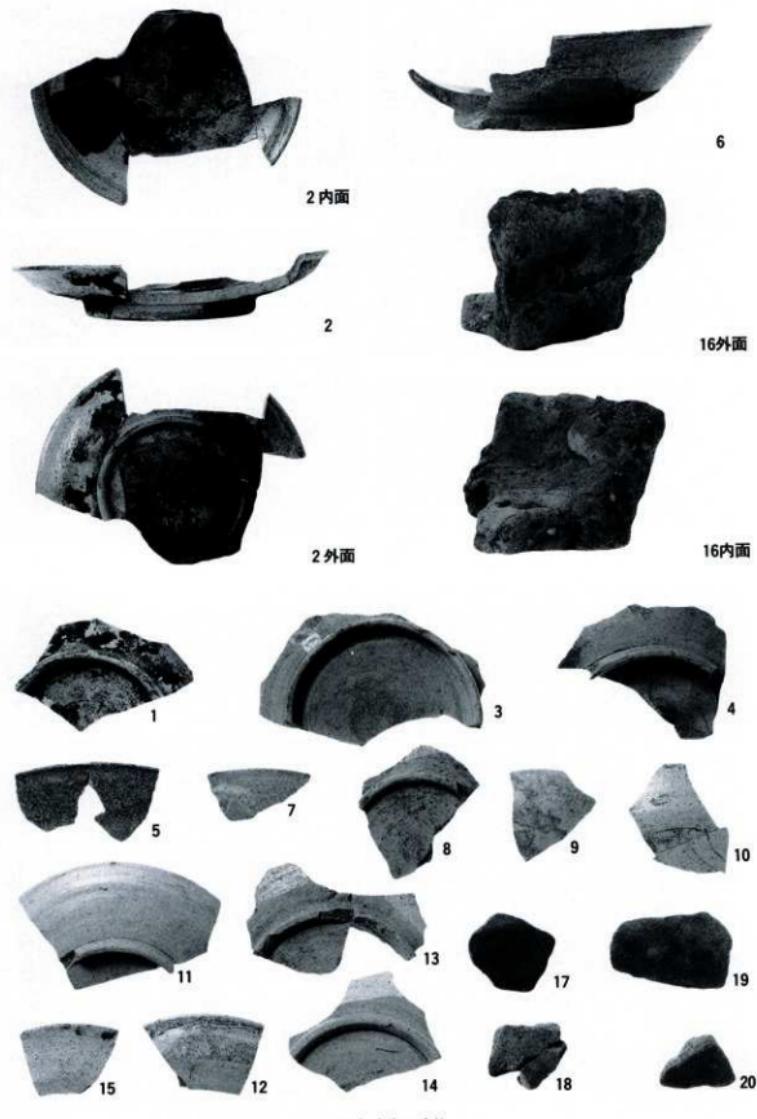


1 調査区西部土坑群



2 調査区南東部土坑群

図版 6



1 平安時代の遺物



1 SK47



2 SK47遺物出土状況



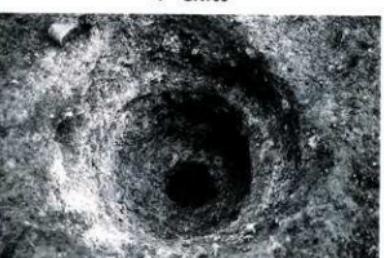
3 SK68



4 SK108



5 SK113土層



6 SK113

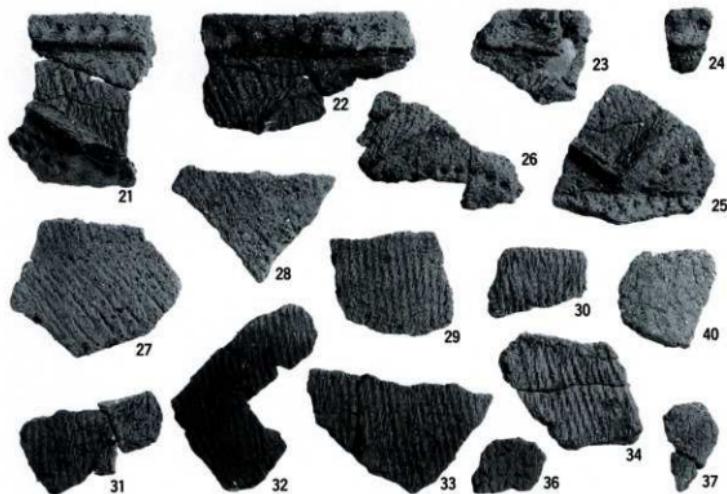


7 石錘(38)紐掛け部拡大

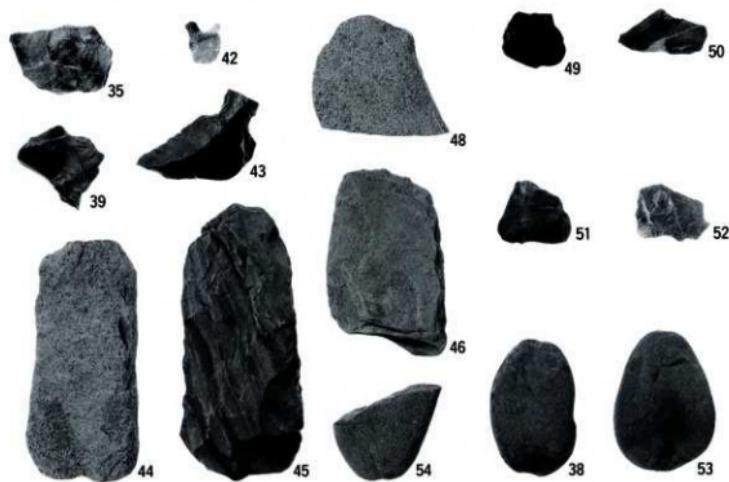


8 打製石斧(45)刃部拡大

図版 8



1 繩文土器



2 石器 ①



41



47



55

1 石器 ②



2 トレンチ4土層



3 トレンチ5土層

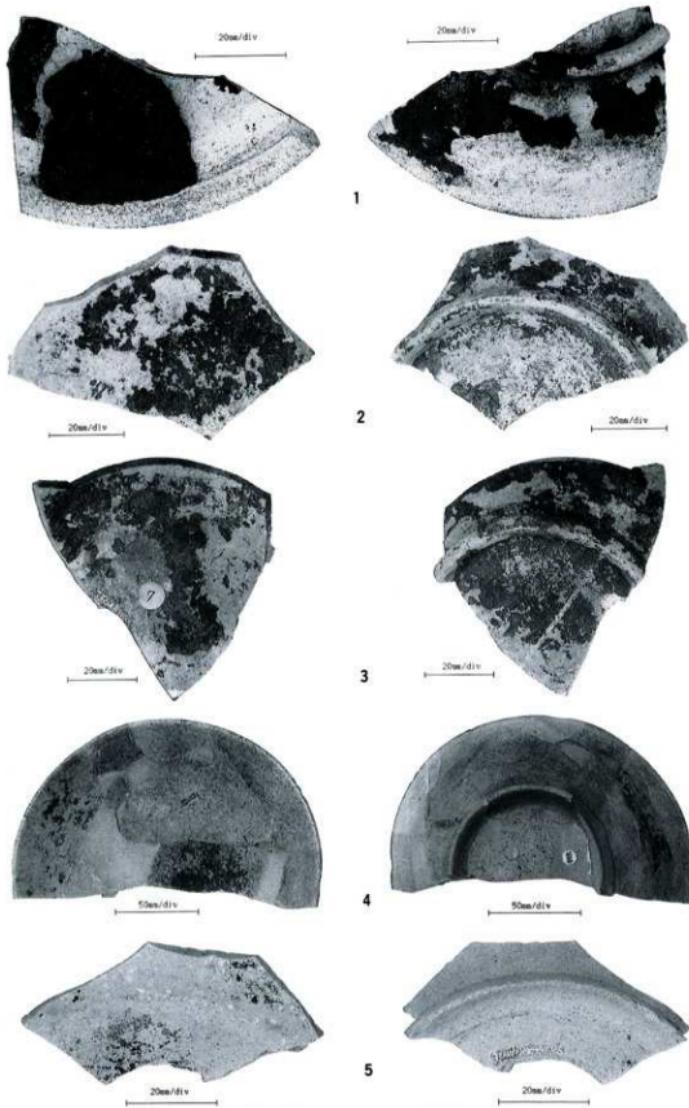


4 トレンチ6土層



5 トレンチ8土層

図版10



1 灰釉陶器付着物のマイクロスコープ写真

## 報告書抄録

ふりがな	てらだいらいせき						
書名	寺平遺跡						
シリーズ名	岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書						
シリーズ番号	第83集						
編著者名	春日井恒						
編集機関	財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター						
所在地	〒502-0003 岐阜市三田洞東1-26-1 TEL 058(237)8550						
発行年月日	西暦2003年12月25日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間 調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号				
てらだいらいせき 寺平遺跡	岐阜県揖斐郡 藤橋村大字塚	21407	08721	35° 43' 38"	136° 26' 10"	20010925～ 20011203 770m <sup>2</sup>	徳山ダム建設事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
寺平遺跡	その他の 遺跡	縄文時代	落とし穴、墓坑など	縄文土器（早期・中期） 異形石器・打製石斧・石皿など		短期的活動の場	
	社寺跡	平安時代	礎石建物跡・掘立柱建物跡・集石遺構・土坑など	灰釉陶器・土師器など		山間部における小規模な宗教関係遺跡	

岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書 第83集

## 寺 平 遺 跡

2003年12月25日

編集・発行 財團法人 岐阜県教育文化財団文化財保護センター

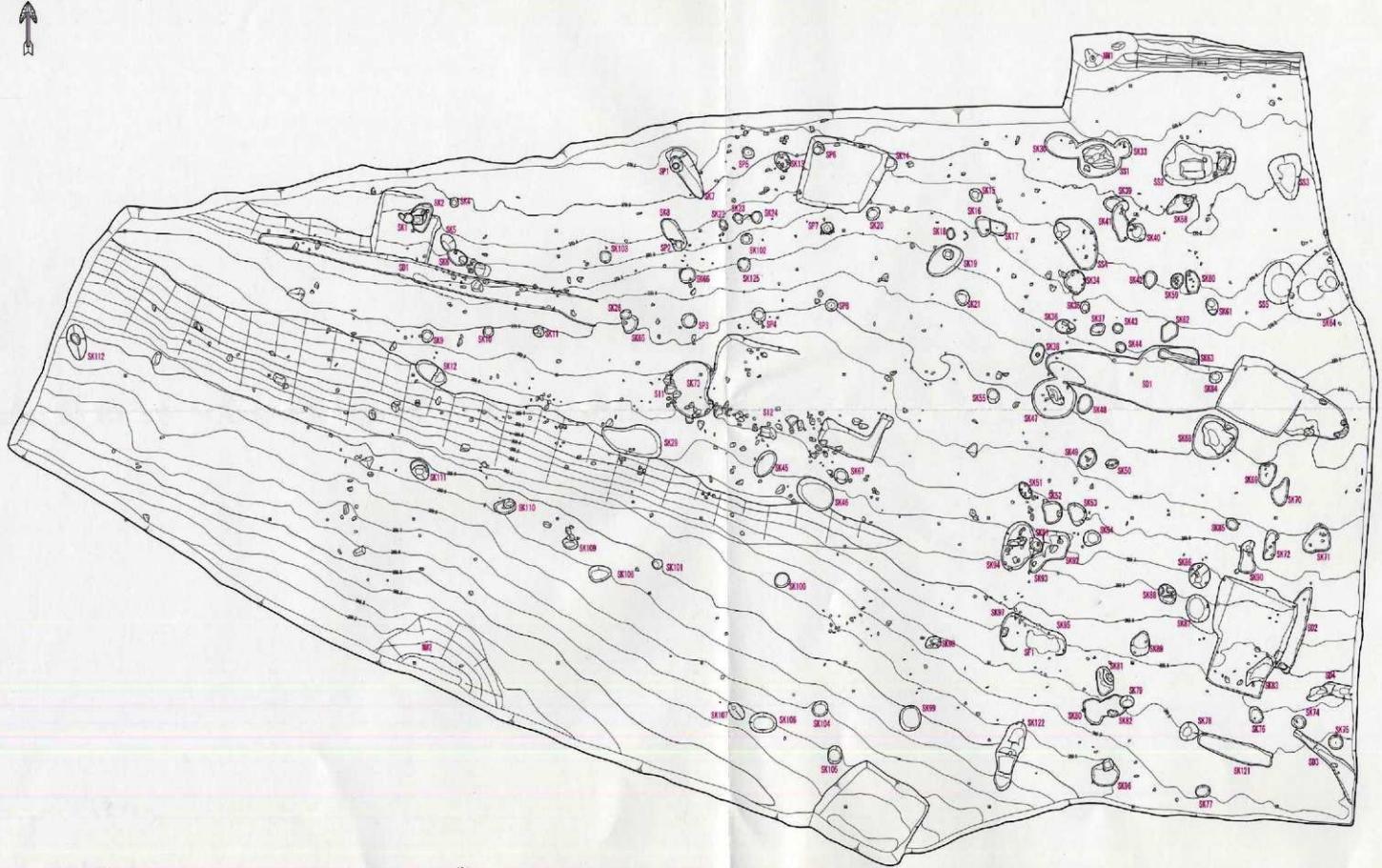
岐阜市三田洞東1-26-1

印 刷 サンメッセ株式会社

### 付図 寺平遺跡調査区平面図

410

四〇九



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

- 1 -